
聖杯を抱く騎士（シュヴァリエ）～Impossible Love～

宝來りょう

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

聖杯を抱く騎士^{シュヴァリエ} Impossible Love

【Nコード】

N9734X

【作者名】

宝来りよう

【あらすじ】

^{しどうあかな}

紫堂緋奈一六歳は、ジャンヌ・ダルクの末裔である。

修学旅行中、家族を原初の闇である精神生命体“ゆらぎ”に殺され、わけのわからぬまま復讐に乗り出すのだが。

相棒は、ジャンヌの元片腕の騎士、ラ・イールことエティエンヌ。

彼は、絶世の美貌の持ち主だが、非常に怒りっぽく説教体質。相性最悪の二人は、喧嘩しながらもなんとか“ゆらぎ”退治をはじめ。

このお話は、一人の少女の成長を描いています。（恋愛もあり）

自己中心的な少女が、さまざまな戦いを通じて人を守るとはどういうことなのかを考えていくというストーリー！。

エリニユスがくれた運命（前書き）

はじめまして、宝來りようと申します。

拙い作品ではありますが、主人公とともに作者も成長していったらと思っています。

読みづらい気がしたので、前書きと後書きは、使用しないことにしました。

この小説のウンチク（？）なんかを知りたい方は、活動報告にいらっしゃってくださいね♪

エリニユスがくれた運命

> i 3 3 7 0 9 — 4 2 7 2 <

エティエンヌと緋奈

イラスト：彩都めぐり

わたしは、彼を愛する。

たとえ、ヘロディアスの娘サロメのように、愛しい男の首しか手に入らないとしても。ただ一度、その冷たい口唇に口づけたいために、わたしは、彼を愛する。

一四三一年 五月三〇日。

北フランスのルーアン、ヴュー・マルシェ広場。

高くしつえられた火刑台に括りつけられた少女の名は、「ジャンヌ」。彼女は、異端の罪により裁かれようとしていた。

（ラ・イール、こんなところまで）

ジャンヌは、群衆の中にかつての右腕であり、恋人でもあった男を見いだした。オルレアンからルーアンまでの数百キロ、どれほどの勢いで駆けてきたのか、彼の白金の髪は泥にまみれ、騎士服は巡礼者のようにずたばろだった。

数十メートルの距離を隔てて二人が見つめあう。
まなかに恋人の最後の姿を移しこむがごとく。

（ジャンヌ……。ジャンヌ・ラ・ピュセル。

わたしは貴女をお救いすることが出来なかった。

だから……こんなわたしにできることといえば、貴女の最期をこの目に焼き付けることくらいです。

愛しています。わたしは未来永劫、貴女だけを愛し続けるでしょう。

ジャンヌは、ラ・イールの言葉が聞こえたかのようにつつすら微笑むと、天を仰いだ。

『イエス様……』

彼女は夢でも見るようにそう呟くと、二度と瞼を開かなかった。

ふたりの刑吏が幾重にも積まれた柴に火をつける。それは瞬く間に紅蓮の焰ほむとなって、小さな少女の身体を舐めていく。

炎に抱かれた救世の乙女は、最後の瞬間ときに何を想ったのだろう。

己の短い人生か、それとも恋人との思い出だろうか。

だが、たとえ彼女の目交まなかに何が浮かんだにせよ、それをけして斟酌してはならない。

人がひとりで生まれ、ひとりで死んでいくことが神代からの約束だとすれば、死に臨んだ想いは、人知れず天園まで持っていくべきもののだから。

ここに、救世の乙女の火刑は終わり、ジャンヌの灰はセーヌ河に流された。それは、魔女の甦りを封じるための仕儀である。

だが、火刑にあったものはほんとうに甦らないのであろうか。

『いいや、違う』とラ・イールは思った。

重い代償を支払わされたジャンヌこそ、来世は、幸せにならなくてはならない。たとえ、その隣に自分の姿がないとしても。

ラ・イールはひざまずくと、ジャンヌの未来永劫の幸福を神に祈

ったのだった。

【追記】 後に、聖女の列に加えられる『ジャンヌ・ダルク』だが、彼女の異端の罪は、現在も取り消されてはいない。

弓張り月。

その夜空に浮かぶ宝剣を焦がれるほどに欲しかった。

だが、月の宝剣は神々のもの、人の手には余る剣なのだ。

それに、欲した力は、今この腕のなかにある。

「何を見ているのですか？ 風邪をひきますよ」

耳障りのいい声がすぐ後ろからする。あたしは、その声に振り返らなかつた。今夜の月があまりにもきれいだったから。

「月をね、見ていたんだ」

小さなアパートの窓いっぱいに三日月が映っている。あたしは、窓辺に座り、時を忘れたようにみていた。

「思い出していたのですね」

「うん」

あたしがようやく振り返ると、中世の騎士衣裳を纏った青年が真っ青な瞳を翳らせながらこっちを見ていた。

彼の名は、『エティエンヌ・ステファン・ド・ヴィニョール』

この舌を噛みそうな名前を持つ青年は、もちろん人間ではない。

いや、元人間といったところだろうか。本人は守護霊のようなものだといっていたから。

エティエンヌは、あたしの母が遺したトランプに付いてきたオプシオンで、『導きの騎士』というものだった。いくら銀で象嵌されたケースに入っているとはいえ、古くてきつちやないトランプのオプシオンとしては豪華すぎるかもしれない。何せエティエンヌは騎士様で、女の子が求める王子様の条件をすべて満たしているの

だから。

月光を紡いで創ったような白金の髪に、真昼の青空の瞳。まるで、昼と夜の具現といったふう。絶世の美貌を持つ彼に見とれない女など、この世に一人としていないだろう。

けれど、あたしにとってエティエンヌは、ただの相棒。もっとうなら、利用すべき相手だ。

「エティエンヌ、行くよ！」

あたしは、もう一度名残惜しそうに、弦月に目をやると立ち上がった。

すると、月光をつけて手のひらの中にサクセサー継承者の徴しるしが浮かび上がる。

あたしは、それをぎゅっと握り締めた。この運命を与えたすべてのものに復讐するために……。

『KEEP OUT』

黄色いテープの内側——。

あたしはまだ煙が燻ぶっている焼け跡に“それ”を見つけた。腰をかがめて“それ”を拾うと、手のひらでぐしゃぐしゃにする。芳香と鉄さびの匂いが鼻をついたが構わなかった。足元に叩きつけ、思いっきり足で踏みしめる。

“それ”の花言葉は不可能。

花に二重の意味を持たせるなんてやってくれる。

ここに“それ”を置くことは、人間には不可能。そして、おまえが家族の敵を討つことは不可能。奴らは『青い薔薇』にそう言わせたいのだ。

『継承者……』

なによ、あたしは眠いのよ。

『継承者……』

『うるさい！さっき寝たばかりなんだから起こさないでよ』

『継承者……』

あまりにもしつこい声にあたしは、仕方なく瞼を開いた。

ありっ……？

なによ、ここは……？

あたしは、ふかふかのベッドから、黒々とした深い闇に墮とされていた。

しかも、目の前にはブラックホールのような大きな渦がある。どうやら、この渦が、あたしをたたき起こしてくれた張本人らしい。

『あのさ、継承者だかなんだかしんないけど、用があるなら早く言ってくんない。明日から修学旅行だし、今夜は、早めに寝たいのよ』

あたしは、わざとらしくあくびをして、寝起きの不機嫌さを少しも隠さなかった。

『んぐるううううううっ……！』

ブラックホールは、あたしの生意気な態度に怒ったのか、突然凄まじい回転を始め、大きく唸り声をあげた。

それでも、これを夢だと思っていた。自分が、紫堂緋奈しどうあかなが、こんな想像力を持つているはずなのに。

『ふふ、お前はただの人間だな。

……の血など少しも感じられぬ。

だが、人間の世界には、“念には念を入れる”という言葉がある』

苦笑交じりの、老人が子供の我がままを聞き流すようなほんの軽い口調だった。

けれど、ブラックホールが、そのセリフを言い終えるか終えないかの刹那、殺気のこもった恐ろしい視線を体中に感じた。底知れぬ恐怖が指先からあたしを凍り付かせていく。

だが、この恐怖は、そんなじよそこの恐怖とは違う種類のものだ。例えば、死ぬほど怖いホラー映画とか、学校帰りに後をつけてくる痴漢とかとは。たぶんもつと本能的な闇を恐れる恐怖に似ていた。

『なによ、ただの人間で何が悪いっていうのよ!』

それでもあたしはせいっぱいの虚勢を張った。人を呼びつけておいて、勝手なことを言うヤツに弱みなんか絶対見せたくなかったから。

けれど、いつまでたっても、お化けからの返事は返らない。それどころか、急激に足元が崩れる感覚がした。

『ちょ・・・ちよつとっ。・・・い・・・いやあああつ・・・!』

あたしは蟻地獄に落ちる蟻のように、バタバタとあがきながら、奈落の底へと落ちていった。

ブラックホールのお化けは腹の立つことに、暴力的にあたしを眠りの奔流へと戻してくれたのだった。

「おはよう!」

あたしは、寝不足で痛む頭をかかえながら階段を下りると、ダイニングテーブルの自分の席についた。ダイニングには、いつもどおりの朝があつて、あたしをほっとさせた。

新婚さんのようにいちやつくスーツ姿の父と母。皿まで食べそうな勢いで、朝食を取る生意気な弟の聖樹。

動物園の熊みたいな父さんが、乗せてくれる端の焦げた目玉焼きは、あたし好みの半熟で、今日もこれからと同じ日が続くことを疑わせない。

悪夢だと思っ飛ばしまえばいい。そうよ、あれは絶対に悪夢。あたしは、自分に必死に言い聞かせた。

「なんだ、緋奈。おまえが食欲ないなんてめずらしいな」

目玉焼きをフォークの先でつついていたあたしに、父さんが心配そうにいった。

「ちよつと眠れなかっただけだよ」

あたしは顔をあげると、父さんを安心させるために少しだけ笑った。

もし、父さんに夢の話をしたら、『ただの夢だよ』といって、いつものように豪快に笑い飛ばしてくれるだろう。

でも、あたしは、ただの夢だと思うことが出来なかった。何故と問われれば、なんとなくという返事しか出来ないけれど。

「姉ちゃん、修学旅行が楽しみで眠れなかったんだろ？ガキみたいだかな」

分厚い食パンにバターを塗りながら茶化してくるのは、弟の聖樹。

「あんたってマジ憎たらしいわね」

あたしは、隣に座っている聖樹の頭をげんこつでぐりぐりすると、ヤツがバターを塗り終えたばかりのトーストをひょいと取り上げてやった。

「なにすんだよー！」

必死にトーストを取り返そうとしている聖樹の頭をなおもテーブルに押しつけてやってからダメ押しとばかりにパンにかじりついてやる。

すると聖樹は、テーブルのうえからくぐもった声で、

「そんなことばかりしてるからひとりも彼氏できないんだよ！」
と言っ飛ばがった。

「聖樹くん、子供のあんたにはあたしのよさはわからないよねえ。」

「まだまだお尻の青いお子ちゃまだもんねえ」

あたしは、聖樹に何度も子供と繰り返しやってやった。中坊のくせに年上の彼女と付き合っているコイツが子供といわれるのを一番嫌うの知っていたから。

案の定、聖樹は、顔を赤くして怒った。

「お子ちゃまって何度も言うな！」

姉ちゃんさ、ほんと俺がモテるからやっかんでいるんじゃないの？」

聖樹はそういうと、勝ち誇ったようにふふんと鼻で笑った。

（こいつめ、本気で可愛くない。今日こそ姉に対する礼儀を教えてやろうじゃないの）

あたしは、バシッとテーブルを叩くと、聖樹のシャツの襟を両手で掴みあげた。

「うるさい！あんた達のせいで大樹のいれたコーヒーがまずくなるじゃないの」

母さんは、白磁のコーヒーカップをソーサーに置きながら、あたしたちをギロリとにらんだ。

（うつ、怖っ！）

あたしは、いやあたしと聖樹は、誰よりも母親が苦手である。

何故かといえば、彼女のきつい三白眼を向けられると、何もしてなくても平謝りしてしまいたくなるからだ。

おそらく、幼児期にトラウマになることがあったのだろうが、それをほじくり返すつもりなどあたしにも聖樹にもこれっぽっちもない。

「母さん、ごめんなさい」

あたしたちは、揃ってクソがつくくらい丁寧に謝ると、お互いそっぽを向きあいながら朝食を続けた。

その時ちょうど、キッチンから出てきた父さんが時計を指差すと

いった。

「緋奈、もう八時だぞ！冴ちゃんが待つてるんじゃないか？」

「えっ、もうそんな時間？」

あたしは、聖樹から奪い取った残りのトーストを口の中に放り込むと、あわてて制服のジャケットをつかんだ。

「聖樹く〜ん。」

愛しの冴子に何かお伝えしましょうか？」

聖樹をからかいながら、すばやくジャケットに袖を通す。

こいつの彼女とは腹立たしいことにあたしの親友で、ふたりは去年の暮れから付き合い始めていた。もちろん、聖樹の強力な押しによって。

「毎日、電話するからって伝えて！」

「・・・・・・」

冷やかしたつもりだったあたしは、平然とノ口けられ、わが弟を宇宙人でも見るように見つめてしまった。

「緋奈。本当に遅刻するぞ！」

父さんにもう一度せきたてられて、あたしは旅行バックを手に玄関へ急いだ。

「いつてきます！」

父さんに手を振り、あたしは、冴子と待ち合わせたセブンへ全力疾走した。時間にきっちりしている冴子は、イライラしながら待っているだろう。

急がなきゃ。

それなのに、あたしの足は何故か歩みを止めてしまった。

振り向いた先には五年前、両親が建ててくれた赤い屋根の家。犬を飼おうという約束はのびのびになったままだけれど。それでも、大切な、たったひとつの我が家。

この時のあたしは、悪夢を不安がりながらも、まさか家族に『ゆらぎ』の手が伸びるとは考えてもいなかった。

もちろん、これが我が家を見る最後になるなど頭の片隅にもない。

あたしにとって日常とは、退屈に平和に変わりなく流れていくものだったから。

九月の雨。

あたしは、今だかつてこれほど雨を冷たいと思ったことはない。肩を抱いて身体をぶるつと震わせる。まるで氷雨のごとく、体の芯まで凍りつかせるようだ。

「いやあああつ………！」

力をなくした腕から、バックが水溜りに落ちる。それさえも気づかない。目のまえの惨劇ゆえに………。

古の都、京都&奈良。

四泊五日の修学旅行から帰ってきたあたしが見たのは、すっかり焼け落ちた我が家と、真っ黒焦げになった父母の姿だった。

もし、強風による新幹線の遅れがなかったら、あたしも両親と一緒に灰になることが出来ただろう。

警官の制止を振り切って、焼け跡に入ったあたしは目を疑った。

かつて、リビングだった場所に一輪の青い薔薇。全てが死に絶えた奥津城おくつきに瑞々しいそれは、かえって禍々しくて。

「まさか………」

思わず滑り出た言葉が犯人を教える。

『念には念を入れる』

もしかしたらヤツは、あたしを殺すために火事を起こしたのではないか。

だが、新幹線の遅れのせいで、あたしというターゲットを殺し損ねてしまった。それが悔しくてヤツは、嫌味な挑戦状を叩きつけてきたのではないだろうか。青薔薇の花言葉まで使って。

ただ、ひとつだけ不可解なことがある。どんなに手を尽くしても、

聖樹が見つからなかったことだ。父母はお互いを庇いあうように折り重なって、焼け死んでいたというのに。

いつもの帰宅時間、遺留品などから聖樹は家にいたはずで。もし、出かけていたとしてもすぐに家に戻ったろう。ラブラブな彼女の帰りをあれほど待ちわびていたのだから。

けれど、一週間がたって、聖樹があたしのもとに帰ることはなかった。

ファティマの預言書？

東京都中央区、京橋二丁目。

東京駅から歩いて十分ほどにある、時代に取り残されたような古いビル。

五階に上がるまでにたつぷり三十秒はかかるだろうエレベーターに乗り、突き当たりのドアを開けると、ビルと同じ年月を生きてきたと思われる男があたしを待っていた。

「紫堂黎子様が遺されたのはこれです。」

小さな、中国人のコックですらダシをとるのを嫌がりそうな、シワだらけの手が差し出した箱をあたしは、しぶしぶ受け取った。このビルの主、神原という老人は、母が雇った弁護士だった。

彼と初めて会ったのは父母の通夜の晩。

もし、この弁護士が弱々しい老人でなければ、あたしは、彼の言葉を聞き入れることはなかったろう。

その後、神原さんはこれといった親戚のないあたしの後見人となり、何くれとなく面倒を見てくれた。今では彼を、祖父が生きていたらこんな感じなのかもしれないとすら思っている。

「ト、トランプ……?」

母さんの遺品とは、なんと銀のケースに入った古びたトランプだった。

（なんでこんなものを?）

普通、母から娘への遺品といえば、もう少しロマンチックなものではないだろうか。

「はい。それは代々黎子様のお家に伝わってきたものだそうです。」

神原さんは、不器用な手つきで二人分のお茶をいれるといった。そういえば、母方の曾祖母という人はフランス人だったと聞く。

外交官だった曾祖父がフランスに駐在していたときに、ふたりは恋

に落ちたのだという。

けれど、もともと身体の弱かった彼女は、自らの子供と引き換えに還らぬ人となってしまった。

曾祖父は、仕方なく生まれたばかりの祖母を連れて帰国した。

だから、母はおるか、祖母さえも曾祖母の顔を知らない。残された写真からすると、儚げな白い花のような美少女であるが。

おかげさまでというかなんというか、祖母も母も異国の血が混じったと思えない純日本人的な容貌だった。いくら戦争が終わったとはいえ、見るからにハーフといった外見では、当時の閉鎖的な社会を生きるのは難しかっただろうから、二人とも運がよかったといえる。

それなのに、何故か二代挟んだあたしと聖樹にはフランスの血が色濃く出てしまった。

明るい茶色の髪に、琥珀の瞳。すんなりと伸びた手足に、白い肌。たとえるなら、西洋と、東洋のごっちゃまぜといったふう。

初めて会った人には、たいてい『ハーフなの？』と聞かれる。最近では、いちいちクォーターと説明するのも面倒くさいので、『まあ、そんなところ』とごまかしている。

「そんなことより、警察の調査はすすんだんですか？」

あたしは神原さんが入れてくれたお茶を手にとると、顔を上げた。

あたしにとって、遺品とはいえなんの役にもたないトランプより、少しでも犯人の手がかりを知ることの方がはるかに重要なのだ。

「ガス爆発ということで、調査を終えるようです」
「・・・・・・・・・・」

今までの経過から、警察がそういう結論を出すだろうとわかっていた。それなのに何故だろう、世界中からそっぽを向かれたような気分になるのは。

あたしは、ガタガタと震え、湯飲み茶碗を落としそうになるのを

必死で堪えていた。

「それで聖樹は……？」

温くなったお茶をぐくりと一息に飲む。

「それも……家出ということで決着させるようです」

漸くといった態で吐き出した神原さんの声がどこか遠くに聞こえる。

彼だつてこれをあたしに伝えるのはつらいのだ。

でもあたしは、もうこんな茶番に耐えることができなかった。

ガス爆発……？

そんなことがあるもんか。まるで結界でも張ったように紫堂家だけを一瞬にして焼き尽くすなんて。しかも、彼らだつて言っていたではないか、『誰も爆発音を聞いていない』と。

彼らは怖いのだ、この事件に関わるのが。

どこからあがつたかもわからない火の手。

ありえないほどの高温で、一瞬にして焼かれた家。

それより何より、存在したはずの人間・聖樹が煙のように消えうせた事実が。

聖樹と冴子の二人は紫堂家が火にまかれる寸前まで電話していて、冴子は携帯の向こう側に両親の笑い声を聞いたという。

聖樹は、家が焼かれるあの瞬間、間違いなく家にいた。冴子が帰ってくるのを待ちわびて。

それなのに何故、聖樹の遺体だけがないのか。まるで、テレポーテーション瞬間移動でもしたように。

「わかりました」

あたしは湯呑み茶碗を茶卓に戻すと、立ち上がった。

もうここには用がない。どんな手段を使おうとも両親の敵をとる
と決めた今、無駄に出来る時間など少しもないのだ。

「緋奈さん、待ってください！」

神原さんは、ノブにかけたあたしの手を老人とは思えない力でつかむと言った。

「まだ、お話があります」

いつにない彼の強い調子に驚いて振り返ると、そこには何かを思いつめた人間がいてあたしは、彼が自分と同じくらい心を痛めているのを知った。

「これを……」

神原さんがソファアールに戻ったあたしに白い封筒を差し出した。

「いいですか、緋奈さん。」

あなたのお母様はご自分たちの死を予感しておられました。そして、それに向けてあらゆる準備をなさったのです。

ところで、緋奈さんは『ファティマの預言書』をご存知ですか？」

母さんが死ぬのを予感していた……？

ファティマの預言書……？

あたしの頭は『？』だらけになった。

「ファティマの預言書とは、一九一七年五月十三日、ポルトガル的小さな村ファティマで、聖母マリアが告げた三つの預言のことです。

第一の預言は『第一次大戦の終結』

第二の預言は『第二次大戦の時期と核兵器の出現』

そして、二〇〇〇年によく公開された第三の預言は『ヨハネ・パウロ二世の暗殺』というものでした。

ですが、当時の法王パウロ六世（在位1963～1978）が、読んだ途端にあまりの恐ろしさに失神したといわれる第三の預言が、ただの法王の暗殺であるわけがありません。

前法王ヨハネ・パウロ二世は二〇〇〇年に来日した際、あなたのお母様に真実の第三の預言をお話しになったのです」

そこまでを一息に話した神原さんは冷めきった緑茶をグイッと飲み干し、荒い息を整えている。

あとう、神原さん。話がでかくなってませんか？あたしは、両親の敵がとりたいたけなんですよ」

「ヨハネ・パウロ二世がお話しになった真実の第三の預言とは『ゆるぎの世界侵略と救世の乙女』についてでした」

救世の乙女・・・？まるでジャンヌ・ダルクみたい。

神原さんったら年寄りのくせに案外ロマンテックなんだから。

あたしは、ニヤニヤ笑いながら尋ねた。

「それってジャンヌ・ダルクみたいなのが現れて世界を救っちゃうつてことですか？」

それなのに、神原さんは、本当にマジで、

「緋奈さん。『ゆるぎ』と戦う救世の乙女とはあなたのことですよ」と、いつてよこした。

「はあ・・・？」

もしかして神原さん。インフルエンザに罹ってタミフルを飲んじやいました？」

七十過ぎても、インフルエンザになるんだとおもいながらあたしは、後見人でもある弁護士顔をまじまじと見つめた。

「タミフルも飲んでませんし、インフルエンザにも罹ってません！

緋奈さん、あなた、本気にしてませんね？」

「やつだあゝ。そんなの、当たり前じゃないですかあゝ。

あたしは、どこにでもいるただの女子高生ですもん。

RPGじゃあるまいし、魔法も使えないのに世界なんか救えません！」

あのね、神原さん。今のあたしは自分のことだって、手に余ってるのよ。『乙女』っていうところは当たってるけどさあ。なにせ彼氏いない歴年の数なんだから。

うつ、まあ、それはそれとして・・・。

でも、世界を救うなんていうのは、他のお暇な方をあたってちゃうだい！

「RPG、なんですか、それ・・・？」

まあ、緋奈さんがお信じになれないのも無理はありませんが。とりあえず、黎子様からのお手紙をお読みになっていただだけませんか

？」

神原さんはこめかみを揉み解しながら、ずいっとばかりに手紙を押し付けてきた。

彼の迫力に負けて手紙を受け取ったあたしは、前髪を止めていたピンをはずすと、ビリビリと一気に封を破った。

便箋には毎日PCばかり打っていたにしては、予想外に整った母の文字が踊っていた。

『紫堂緋奈さま。』

あんたがこの手紙を読んでいるってことは、あたしたちは死んじやったわけよね。

でもね、緋奈。親は先に死ぬもんなのよ、早いか、遅いかの違いはあってもさ。だから、くよくよしなさんな。

あたしは、大樹とあんたたちに出逢えて幸せな人生だった。少しの後悔もないわ。

でも、あんたがこれから先、厳しい戦いをしていくかと思うと、ちよっぴり心配かな。

ところでそんなあんたにとってもいいお知らせ。

そのトランプには、ステキなオプションがついてるの。しかもめちゃくちゃいい男。これからは彼と一緒に生きて行きなさい。

緋奈、最後にひとつだけ言っとくわ。

もし、あんたがイヤなら世界なんて救わなくていいのよ。あんたは、あんたの好きなように生きていきなさい。それだけが、あたしと大樹の願いなんだから。』

手紙を読み終えたあたしは、なんだか笑ってしまった。手紙の中の母さんが相変わらずだったから。

無類の面白がりに加えて、羨ましくなるくらいポジティブで。あたしは、そんな母さんが大好きだった。かなり苦手だったけれど。『わかりました。っていうか、まだわからないことだらけなんです

けどね。

とりあえずトランプのオプションっていうのはなんなんですか？」

あたしは、ハンカチで鼻水が落ちてくるのを防ぎながら言った。

「代々の継承者を守護する騎士だそうです。」

黎子様は『導きの騎士』といわれていましたが」

ふーん、導きの騎士ね。今度はファンタジーもどきかい。

「それで、その導きの騎士さんとやらには、どうやったら会えるんですか？」

「さあ、わたしにはわかりません、彼に会えるのは継承者^{あなた}だけです。」

ただ、あなたがそのトランプを持っている以上、そのうちひょっこり顔を出すのではないですか」

神原さんは、さもおかしそうにクスクスと笑った。

この時、神原さんが意味ありげに笑った意味を後らしみじみ知るんだけど、それどころじゃなかったあたしは、必要以上に突っ込まなかった。まあ、この時突っ込んだいたからって、アイツの激烈な性格が変わるわけじゃないんだけどね。

「そうですか。」

とりあえず、今日は帰ります。色々ありがとうございました」

きつちやないトランプを手に事務所を出ようとすると、妙に明るい神原さんの声があたしの背中を追ってきた。

「緋奈さん、わたしは、あなたという犠牲がなければ救えない世界なんてぶっ壊れてしまってもいいとおもっていますよ」

「・・・・・・・・・・」

あたしは、振り返らずにそのまま頷いた。

神原さんの言葉は、とてもありがたかったけど、あたしは、自分が『救世の乙女』だなんて少しも考えていなかったのだ。

相変わらず今にも止まりそうなエレベーターから降りると、目が

覚めるような明るい秋の空。昨夜の雨がスモッグを浄化し、東京の空をきれいに晴れ渡らせたのだらう。

何か進展したのかな？

神原さんは『ゆらぎ』と呼んでいた。たぶん、あの大きなブラックホールのことだろう。

今まで何の手がかりもなく、イライラさせられていたことを考えれば、これは間違いなく進歩だといえる。

でも、今のあたしには、世界なんてどうでもよかった。ただ、家族と幸せが続いただろう毎日を奪ったヤツが許せなかった。たとえ、母さんが何の後悔もないといってくれたとしても。

そう考えると、復讐は死んだ人間のためでなく、残されたものが生きていくために行なうものなのかもしれない。だから、それが為ならどんなことでもしよう。

あたしは、久しぶりに雲ひとつなく晴れ渡った東京の空にこぶしを振り上げて誓ったのだった。

ファティマの預言書？

「やれ、やれ、東京に行くとやつぱ疲れるわ」

ようやくアパートに辿り着いたあたしは大きく伸びをすると、デイベックから一冊のノートを取り出した。

そのバックはもちろん、ノートさえまっさらの新品である。

あの事件は家族ばかりでなく、慣れ親しんだ全てのものを奪い取っていった、帰る場所さえも。

ここ、神原さんの借りてくれたアパートは家具家電付きで、持ち物といえば修学旅行に持っていた旅行バックひとつだったあたしには、心底ありがたいものだった。

十畳の部屋に作りつけられたダイニングテーブルにノートを広げると、頬づえをつく。

レトルトカレーを突っ込んだ鍋があげるシュンシュンという音を聞きながら、あたしは、今までの出来事をひとつひとつ整理していた。

まあ、『ファティマの預言書』とかの話は、なんかの間違いだとしても、あたしには、『ゆらぎ』とやらから、狙われる理由があるのだろう。ヤツは、夢の中で繰り返しあたしを『継承者』と呼んだのだから。

それが母の残したトランプの『継承者』だとするなら、トランプが謎を解く鍵ということになりそうだ。あたしは、神原さんから渡されたトランプをバックの上から触れてみた。

その時、キッチンから湯の沸きかえった鍋のゴトゴトいう大きな音が耳に入り、レトルトカレーを温めていたのを忘れていたあたしは、勢いよく立ち上がった。その拍子に膝の上のバックが落ちてしまった。口が開いていたせいで中のものが全部ぶちまけられている。

まあ、仕方ないや、後から拾えばいつか。あたしは、とりあえずキッチンへ向かった。

「腹が減っては、戦は出来ないうてね」

冷蔵庫の中から出来合いの春雨サラダを取り出すと、レンジの上に置かれたデジタル時計がパランとめくられ、14:16分を示した。とたんお腹がグーとなる。

木製のトレイに山盛りのカレーライスと春雨サラダ、カップのミネストローネを乗せ、部屋に戻ろうとしたあたしは、しばらく自分の目を疑ってしまった。

「えっ……！！？」

さっきまで誰もいなかったはずの部屋に『キングアーサー』バリの騎士様が例のトランプを手に不機嫌そうに立っていたのだ。我ながらよくもトレイを取り落とさなかったものだと思う。

念のため、もう一度目をこすってみる。

どうやら夢じゃないらしい。

午後の光にきらめく白金の髪は、肩に届くほど。そして、ブルーサファイアの瞳は、切れ長で高い鼻梁へとつづく。薄い口唇が歪められているのさえ映画のワンカットのようだ。

モデル並みの身長と鍛えられた体躯まで持ち合わせた男は、ハリウッドスターも到底及ばない恐ろしい美貌の持ち主だった。例えるならギリシア神話の太陽神アポロン降臨といったふう。

「Who are you？」

あたしは、唐突に登場した美神に思い切って片言の英語で話しかけた。

「記憶力の欠如」

彼の第一声は、それだった。聞きほれてしまうほどの美声だといふのに、妙に無機質。

「日本語、しゃべれるんですか？」

「あなたは、とことん記憶力がないようですね。

その上危険予知能力も低い」

むっ、なんで不法侵入してる外人に罵倒されなきゃいけないわけ？あたしは、トレイを置くと、テーブル越しに男をにらみつけてやった。

それにしてもこっちがいい加減気分を害してるというのに、彼は不機嫌そうに眉を寄せたまま。しかも次の言い草がさらにむかつくのよ！

「あなたは、バ力ですか？

見知らぬ男がいきなり現れたらまず逃げるべきではありませんか？」

「逃げる……？」

「そう、こんなふうにされないうちにね」

「えっ？」

いきなり肩をつかまれて、後ろの壁に痛いくらい叩きつけられた。二本の腕が作り出す甘やかな牢獄の中、容赦なく髪をつかんだ白い指に思いのまま仰向かされる。

それなのに、男の瞳を覗き込んだ刹那、あたしは、がたがたと震えが止まらなくなってしまった。まるで、雷に怯える小さな女の子のように。

彼の瞳は、夜闇を切り裂く一条の光、罪人を断罪するための。

人の形をした稲妻は、冷たい手を頬に伸ばし、接吻くちづけという罰を課そうとした。

「あんたのしたいことをしたらいいじゃない！」

あたしは、やけっぱちになって叫んだ。

もし、自身を差し出した代償に彼という剣やいばを得られるのなら、この見も知らぬ男に抱かれてやってもいい。神の雷いかずちなど恐れるものかあたしは、どんな手段を使おうとも自分の運命に復讐すると決めたのだから。

「これ以上、無くすものなんかないんだから」

あたしは、口唇を突き出すと、大人しく瞼を閉じた。

「緋奈……」

唐突に男の腕が緩んだ。あたしは、激情という名の稲妻が鎮まったのを知った。

「導きの騎士さん、あなたの名前は？あたしは、紫堂緋奈^{しゅうあかな}」

あたしは、弾んだ息を整えるとイスに座り、目を瞬かせている男の名を尋ねた。

「ラ・イール……」

「ラ・イール。『怒れるもの』という意味ね。それはあなたの苗字？」

「いいえ。あだ名です。」

本当の名は、エティエンヌ・ステファン・ド・ヴィニョール」

「ふうーん。じゃあ、エティエンヌ。あなたの知ってることを話してくれない？」

あたしは、さも当たり前のようにお願いすると、恐ろしいほどの部屋に不似合いな騎士様に向かいの席に座るように促した。

でも、エティエンヌはいつまで待っても座ろうとしない。いいかげん痺れを切らしそうになった頃、ぽつりといった。

「ラ・イールと呼んでいただけませんか？」

「いや！」

一言の元に断ってやると、エティエンヌは震えるように眉を動かした。

「あなたのお母様はわたしをラ・イールと呼んでくださいました」

「だから……？」

「ラ・イールと呼んでください！」

「いや！だってあんた、あたしのこと緋奈って呼んだじゃない。

だから、あたしもあんたのことエティエンヌって呼ぶわ！」

するとエティエンヌは、あきらめたようにがっくり肩を落とした。

ふふっ、やった。VICTORY！対人関係はね、最初が肝心なのよ。どうせ顔じゃ勝てないんだから、立場くらい優位にしなき

やね。

あたしは、青筋の浮いたエティエンヌの顔を見ながら、さも可笑しそくに声を立てて笑ってやったのだった。

ファティマの預言書？

「緋奈。あなた、性格が悪いといわれませんか？」

あたしがすっかり冷めてしまったミネストローネをスプーンで口に運んでいると、お行儀良く足をそろえて座っている騎士さまが聞いてきた。

「はんで、ほんなほと、ひふの？」

「しゃべるか、食べるかどっちかにしてください。まったく行儀の悪い」

「仕方ないじゃん。死ぬほどお腹が空いてたんだから。」

それに、なんであんなに他人の性格をどうこういうわけ？あんなにだけはとやかくいわれたくないんだけど」

「それはどういう意味ですか！？」

また、また一触即発の危機。

エティエンヌって『怒れるもの』という二つ名なだけあって、本当に怒りっぽいよね。今も眉間にびっちり青筋を浮かべている。

「エティエンヌ。いい加減怒るの止めなよ。」

あんたのせいで少しも話が進まないじゃん」

ようやく食べ終えた食器をキッチンのシンクに下げると、あたしは彼の眉間のシワをぐりぐりと伸ばしてやりながらいった。

「だから、エティエンヌと呼ばないでくださいと……」。

あっ……！

また、自分が話を脱線させていることに気づいたエティエンヌが口元に手をやった。

「緋奈は、わたしが導きの騎士だと気づいていたのですね。それでは先ほどバカだといったことは撤回しましょう。」

それで、何をお聞きになりたいんですか？」

「全部……といたいところだけど、とりあえずは『ゆらぎ』について教えて」

「いいでしょう。あれらは原初の闇より出でて、人を滅びに向かわせる存在。」

緋奈、あなたは創世記を読んだことがありますか？」

エティエンヌは、蒼色のとびつきりきれいな瞳で、真正面からあたしを見つめてくる。

「旧約聖書の・・・？」

「ええ。創世記の冒頭、『神が光よ、あれ』と仰せられたとあります。そして、昼と夜が別たれた。では、光は昼、闇は夜を指すことになりますよね。」

ですが、光を呼び、昼と夜を創つても、なおも闇は地にあふれかえっていた。そこで神は仕方なく、残った闇を地中深く封じました。

けれど、エデンから追われた人間が地に満ちると、負の感情が積もりはじめ、封じられた闇を呼び覚ましたのです」

「それが『ゆらぎ』？」

「はい。便宜上彼らといいますが、『ゆらぎ』はひとつの大きな意思であり、無数に枝葉のわかれた精神生命体でもあるのです」

「へえ」。でも、そんなのが何であたしを殺そうとするの？」

「それは、あなたがわたしの愛した少女「ジャンヌ・ラ・ピュセル」の末裔だからです。」

ジャンヌが神から与えられた使命は、フランス一国を救うただそれだけのものではなく、目覚めた『ゆらぎ』を封じ、この世を平和に導くことだったのです。

ですが、彼女はその使命を完全に果たすことができませんでした。そして今、ジャンヌがしとめ損ねた『ゆらぎ』は、再び力をつけ、この世を我が物にせんと動き始めたのです。

いいですか、緋奈。彼らは、生まれ出でてよりこの地球を原初の混沌とした闇の世界に還したいと願っているのですよ」

彼の話は、あまりにも荒唐無稽だった。エティエンヌの口から語られるのでなければ笑い飛ばしたいほどの。でも、彼がここに存在

する、それが真実であることの証しなのだ。

「エティエンヌ。あたしにはなんの力もないわ。どんなに父さんと母さんの敵を討ちたいと願ってもね」

あたしはテーブルに目を落とすと、血がにじむほどにこぶしを握り締めた。

「いいえ。力はすでにあなたの中に。トランプがあなたの助け手となるでしょう」

そういうと、エティエンヌはトランプのふたを開け、出したカードをテーブルに大きく広げた。

そこから、白く長い指でハートのジャックを選び出す。

「これは、わたしのカードです。」

いいですか、このトランプの各スート《トランプのマーク》、ジャック、クイーン、キングにはそれぞれルーラー《支配者》がいて、あなたのエナジーが満ちることに新しいファクリティ《能力》を授けてくれます。

そして、すべてのエナジーが満ちれば、あなたは全部で12のファクリティを得ることができるでしょう」

「ふーん。どんなファクリティが得られるの？」

「さあ、それは得たときのお楽しみですね。」

それより、ハートのジャックのファクリティを欲しくはありませんか？」

「く、くれるの？」

「ええ、今のままでは丸腰で敵に立ち向かうようなもの。」

お立ちなさい、緋奈」

エティエンヌは躊躇いがちに立ち上がったあたしの前にうやうやしくひざまずいた。

「巡れ、因果律！神の英雄、聖天使ガブリエルよ。この者をサクセスー《継承者》足らしめよ！」

刹那、虚空に振り上げた彼の左手からおびただしい光が溢れ出し、部屋中にあふれた。

エティエンヌは、あたしの手を額に押し頂くようにしてから、手のひらの中心に口づけた。すると、彼の口唇が触れた場所に小さな刻印が刻まれる。

「オリーブ……？」

「はい。オリーブは聖天使ガブリエルの標しるしです」

「ふーん。それはいいんだけどさ。あんた、いつまでキスしてんのよ？」

「イヤですか？」

上目遣いの、潤んだ瞳でみつめられて、あたしは、考えられないほどドキマギしてしまった。

「イヤって、あんた……」

エティエンヌは、とっさに引つ込めようとしたあたしの手を強引につかむと、手のひらの中心をゆっくりと舐めあげた。すると、それだけのことなのに何故だろう、指先から甘い痺れが広がっていく。

「あっ」

「感じてしまいましたか？」

絶対こいつ、あたしで遊んでる。

まったく、なんつう騎士さまだ。つくづく先が思いやられるわ。

「エティエンヌのバカ。このセクハラ親父！」

あたしが掴まれた手をぶんぶん振り払いながら罵ると、エティエンヌは、

「セクハラ親父とはなんですか！わたしは女性からそんな言葉を頂いたことはありませんよ」とこめかみをピクピクさせながらいった。

「なによ、少しばかり顔がいいからって。

大体あんた、何百年生きてるわけ？親父なんていつてもらえるだけありがたいと思いなさいよ！」

すぐさまあたしが言い返すと、エティエンヌもエティエンヌで少しも黙っちゃいない。

「あなたは今までの継承者の中で最悪の礼儀知らずですね。そんなことではこれからもうずっと恋人が出来ませんよ」

エティエンヌ、あんた、この世で一番口にしてはいけないことをいったわね。

あたしとエティエンヌは、長いことにらみあった末、ふんとはかりに顔をそむけあった。

どうやらあたしたちの相性は、前途多難に最悪である。

あたしは、エティエンヌがくれたフアクリティがなんなのか確かめることも忘れてもう一度お腹が空いてくる時間まで、えんえんやりあったのだった。

再会はマチネーのごとく ？（前書き）

再会はマチネーのごとく？

『Blue st blue in blue』

青の中の青――。

遠いギリシアのガイドブックを見ながら母さんが言った言葉。

母さんは、あの時おそらく、エーゲ海とダブらせていたに違い
ない、自らの騎士の瞳を。

海は、空の色を映す。

だとすれば、エティエンヌの真つ青な瞳は、一体何を映している
のだろう。

あたしは、遙かフランスに続いている青空を見上げた。

「なあに、辛気臭い顔してんのよ」

「冴子………!？」

「おりよ!？もしかして陸上部に意中の彼でもできた？」

冴子は、あたしの視線を目で追うといった。

「……………」

確かにこのポジションは、陸上部の練習を熱く見つめるにはうつ
てつけである。あたしは、ずいぶん長い間、教室の窓際の机に頬
杖をついたままグラウンドを眺めていたことに気づいた。

けれど、あの連中の中からどうやって意中の彼を見つけろという
んだろう。

芋や南瓜ならスーパーで選んだほうがものすつごく手っ取り早い
と思うんだけどな。

そんなあたしの気持ちを正確に読み取ったのか冴子は、にんまり
笑い、

「そりゃ、あんたの騎士さまと比べちゃ、日本の男なんて芋か南瓜
よねえ」

と、からかうようにいった。

「なつ、あいつが いいのは顔だけよ。ちょー激悪な性格してんだから」

それに、エティエンヌは、あたしの前に二度と姿を現さないだろう。五日前、あんなに傷つけてしまったのだから。

あの晩――。

東京まで出かけた上、エティエンヌとさんざんやりあって疲れたあたしは、普段より早めに床についた。翌朝は、もちろんぎりぎりまで寝ているつもりなのはいうまでもない。

けれど早朝、人の髪を何度もひっぱるヤツがいるから、誰かと思えば、あの心臓に悪い顔がどアップで。

『緋奈、何度起こされれば気がすむのです！』

そんなことでジャンヌの継承者は、到底務まりませんよ』

しかも、妙にテンション、高いしね。

『なんだあ、エティエンヌじゃない。』

ほら、まだこんなに暗いよ。一緒に寝よう』

あたしは、エティエンヌの首をつかむと、布団の中に強引に引っぱり込んだ。

だって寝ぼけてたんだもん。起こされるのはイヤだったし。エティエンヌも

一緒に寝かせてしまえば、これ以上睡眠を妨害されないと思ったのよ。

『これは、積極的なお誘いですね』

というエティエンヌは、あたしに首を抱かれたまま、頬に口づけた。そして、空いているほうの手でパジャマのボタンをふたつほど外し、そこに顔をうずめてくる。

そこまでされてようやくあたしは、目を覚ました。エティエンヌを自分からあわてて引っぺがすとベッドから飛び起きた。

『何すんのよ！』

『何って、あなたがお望みになったものではありませんか？』

『の、望んでるわけないでしょう。エティエンヌのバカ、スケベ！』
あたしは、外されたボタンを急いでとめると、両胸を手で隠した。
だって、何げにノーブラだったんだもん。

『ならさっさと起きなさい！』

エティエンヌの怒鳴り声が、狭い部屋いっぱいに響いた。

『あんた、わざとやったでしょ？』

あたしは、毛を逆立てた子猫のようにエティエンヌを睨みつけた。
『あたりまえです。』

あなたのようなお子ちゃまに手を出すほど、女性に不自由していません！

そんなことより、緋奈。わたしのフアクリティが欲しいなら、着替えてさっさと外に出なさい』

むっかぁ・・・！！

お子ちゃまで悪うござんしたねえ。そりゃ、あんたはその顔だもん、女性に不自由しなかったでしょうよ。

でも、あたしは鼻先に人參をぶら下げられた馬、どんなに腹立たしくても、エティエンヌの言いなりになるしかない。だって、ただの女子高生がなんの武器も持たずに“ゆらぎ”なんてわけわかんないのと戦えるわけないもん。

それなのに。

そこまで我慢したあたしに、エティエンヌがくれたフアクリティってなんだったと思う？ただのレイピア一本よ。

あたしたちは、エティエンヌが誰も近づかないようにと張った結界の中でまたもや睨み合っていた。

『エティエンヌ、悪い冗談よね？』

『わたしが冗談を言う性格に見えますか？』

それに、これはただのレイピアじゃありません！」

『へえ〜タダじゃなきゃいくらなのよ？』

あたしは、嫌味な口調で言い返した。

でも、エティエンヌは、そんなあたしにまったく取り合わなかつ

た。

『このレイピアは、ジャンヌのものです』

『だから……？』

『だから？とはなんなんですか。ジャンヌが遺した貴重なものなのですよ！』

エティエンヌは、顔をしかめ、いつそう声を荒げた。

『ジャンヌ……ジャンヌ……ジャンヌ……。もう、うんざり！』

そんなに彼女がやり残した使命を果したいなら、あんたがやればいいじゃない。

この際だからはっきり言っとくけどね。あたしがあんたの言うことを聞いているのは父さんと母さんの敵を討ちたいからよ。世界を救うだの、先祖がやり残したことを果さなきゃだの、そんなことはちつとも考えてないんだから』

あたしは、こんなの役に立たないとはかりにレイピアをぽんと野原に放りだした。

夜明けのさやさやとした風が、すすきとエティエンヌのマントをほんのわずかに乱していく。

息が詰まるほどの長い時間。いや本当は数分ほどだったのだろうけれど。

エティエンヌは、その間ひとことも口を開かなかった、いつもあれほど怒ってばかりいるくせに。まるで、親にはぐれた子供みたいに、泣き出したいような、叫びだしたいような顔のまま、しばらく突っ立っていた。

エティエンヌは、レイピアを拾い上げた後、あたしに深々と頭を下げると、セルリアンブルーのマントをひるがえした。あの『Best blue in blue』の瞳を翳らせながら……。

それを境にエティエンヌは、一度も現れなくなっていた。

「あんだ、ここんとこずつと元気ないけど、騎士さまとケンカでもしたの？」

「あたしさ、たぶんエティエンヌに一番いっちゃんいけないことをいっただんだと思う」

「ふうーん。なんていったの？」

冴子は、じいつとあたしを見つめた。

母さんが遺したランプのことも、そのランプにエティエンヌがついてきたことも全て白状させられた瞳で。

あたしは、今まで冴子と聖樹をただのバカカップルと見ていた。けれど、今は若くしてただひとりの人に巡り逢えた二人をすごいとさえ思っている。恋に未熟なあたしにさえそう思わせるほど、冴子は、聖樹を想っていた。

だからあたしは、冴子をただの親友というより戦友と思ってこの事件に関するすべてのことを少しも隠さなかった。

「・・・・・・・・」

あんだのいうことを聞くのは、世界を救うためでもジャンヌのためでもない、父さんと母さんの敵を討つためだって。

それに、そんなにジャンヌが大事ならあんだが“ゆらぎ”を退治すればいいじゃないともいつちやった・・・」

あたしは、血が滲むほど口唇をかみ締めた。

「あんだは、本当にバカね。」

どうして彼が五百年以上も「導きの騎士」をやってんのかあたしは知らないわよ。

でもね。そんなあたしでもこれだけはわかる。彼が心からジャンヌを愛していて、彼女の死を自分のせいだと思ってるってことくらいわね」

冴子は、ふうと溜め息をついた。おそらくエティエンヌと自分をだぶらせているのだろう。

ジャンヌ・ダルク —————。

大人なら誰でも知っているこの歴史上の人物の右腕といわれた「ラ・イール」を調べることは容易かった。

一四四三年一月十一日。

彼がモンローバンで死去するまで、ジャンヌを死なせたことを悔やみ続けていたことも。

あたしには、何故、エティエンヌが「導きの騎士」になったのかはわからない。けれど、恋人が死んで五百年以上、彼女の子孫を守り続けてきた、これは非常な尊敬に値する。

いや、けして誰にでもできることではない。想像を絶するほどの精神力と恋人に対する深い愛があつたればこそだろう。

「……うん」

「なら、あんたがやるべきことはわかるわね」

「うん、エティエンヌに謝る」

あたしは家に帰ったら、早速エティエンヌを呼び出して謝ろうと思つた。

それなのに冴子は次の瞬間、とんでもないことを言い出してくれたのだ。

「でも、緋奈にも甘えられる人が出来てよかったじゃない」

えっ、あたしがエティエンヌに甘えてるって？

あの怒りんぼ魔人に？

「冴子。それだけは天地がひっくり返つてもありえないから！」

あたしは、冴子の鼻先で手をヒラヒラ振ると、開けっ放しになつていた窓を勢いよく閉めた。

晩秋 —————。

夜の訪れは早く、すっかり暗くなった空には、細い細い三日月が上がっている。あたしは、冴子の肩を抱くと、すっかり人少なくなつた校内を後にしたのだつた。

再会はマチネーのごとく？

「ちょっと、緋奈。そんなに強くつかまないでよ、痛いじゃない」

あたしは、震えながら、冴子の左腕をがっちりつかんでいた。

「だってこの公園、こないだ子供の死体が見つかったとこなんだよ」

「バカねえーもう一カ月も前のことじゃないの」

冴子は、そういいながらも仕方ないという顔をして、あたしの手を繋いでくれた。まあ、あたしが幽霊の類を大の苦手としているのを知っているからだけだね。

「そ、それだけでもすっごく怖いよ。」

それに・・・見るからに出そう」

あたしと冴子は、駅前のマックで軽くご飯した後、お互いの家へ帰るところだった。

でも、その途中にある大きな公園がね、女兒連続殺人事件の現場というか、死体が捨てられてあった場所なのだ。

それに、夜の公園の人気のなさってありえないよね。昼間は、あんなに賑わってるのにさ。あたしはびびりまくって、冴子の手をいっそう強く握り締めた。

すると、痛そうに顔をしかめながら冴子は、

「何いってんのよ。たとえ、なんかが出たとしても、あんたにはかつこいい騎士さまがついてるじゃないの。ピンチにはスーパーマンよろしく助けに来るんでしょ！」と、言ってくれやがった。

冴子さん、エティエンヌは、ランプの精じゃないから『呼ばれて飛び出でじゃじゃじゃーん！』ってことは絶対ないとおもうよ。それに、エティエンヌが童話に出てくるような親切な騎士さまだったらこんな悩んでないしね。

「冴子さん、お聞きしますが、あのエティエンヌがそんなにアグレッシブだと思いますかあー？」

「うーん。聖樹なら絶対に助けに来そうだけど」

ああ。はい、はい。ご馳走さま。

そりゃ聖樹は、冴子がちょっとでも困っていると、スーパーマンよろしく現れてたけどさ。

でもあんたたちの場合、そこに愛はあるから助けに来るだろうけど、あたしたちの場合、そこにきっぱり愛はないからエティエンヌが助けにくるなんてことはありそうにない。

「じゃさ、冴子。ためしに襲われてみたら？」

聖樹なら何をしててもどこにいても絶対、冴子の元に駆けつけてくるよ」

そう、たとえ行方不明であっても。

あたしは、心の中でそうつけくわえた。

「そうね。聖樹にもう一度会えるんならそうしてみようかと思うわ」

冴子は、そういうと少し淋しげに笑った。

あの父母を亡くした冷たい雨の降る晩 —————。

一生分の涙を流すみたいに泣いているあたしの隣で、冴子はずっと肩を抱いてくれていた、一緒に涙を流しながら。

でも冴子は、思い立ったように泣き止むと、あたしの顔を覗き込んでいった。

『ねえ、緋奈。あたし、聖樹は、どこかで生きている気がするの。だから絶対にあたしたちのそこへ戻ってくると思うわ。だから、もう泣くのはやめにしない？』

あたしは、鼻水を拭うのも忘れて、幼なじみ兼親友の顔をマジマジと見つめた。

冴子の顔は、あたしとおんなじように瞼は腫れてるし、泣きすぎて鼻の頭は真っ赤だったけれど、今までで一番綺麗でまっすぐな瞳をしていた。

ああ、恋はなんてすごいんだろう。

ただの女子高生をこんなに強くするのだから。

でも、少しだけ怖い。誰かを自分の中に住まわせるのは。きつと、あたしはその誰かにひどくのめりこんでしまう、そんな予感がして。

『うん、アイツなら幽霊になっても冴子んところに帰ってきそうだもん、姿を見せないってことは、聖樹の生きてる証だよね?』

あたしは、何度も頷きながらそういう、冴子を思いっきり抱きしめた。そして、それ以来あたしたちは、本当の家族のように寄り添いあつて生きてきたのだった。

「でもさ冴子。聖樹つてば、ご飯中だと助けに来ないじゃない。今、ご飯中かも知れないしさ。だからこんなとこ、さつさと通り抜けてうちへ帰ろう?」

あたしは、冴子の背中をポンポンと叩きながらいった。

「それは、ありえるわね」

あたしたちは、お互いをかばいあうように足早に歩き出した。

そんな時、「すいませ〜ん」

どこか間延びした男の人の声がかかった。あたしたちはあまりのタイミングのよさにギョっとしてしまった。

おそろおそろ振り返った後ろには、二人組の若いお巡りさん。

なんだあ、おまわりさんかあ。おどかさないでよ、もう。

ノッポのほうのお巡りさんが

「ここを通るのはあぶないですよ!」と言う。

お巡りさんたちは、ふたりとも懐中電灯を持っていたから、公園内の見回り中だったのかもしれない。

「すいません。二人だから大丈夫かと思って」と冴子。

「でも最近物騒だから家まで送っていつてあげるよ」と、眼鏡をかけているほうのお巡りさん。どうやら親切にも家までついてきてく

れるらしい。

でも、あたしは……。

「ありがとうございます」

けれど、あたしが断るより先に冴子がOKしてしまった。

「……………」

あたしたちは、おまわりさんに先導され、一番人気のない場所にさしかかった。

夕方、学校を出るときは、シャムシール（半月刀）のごとく光り輝いていた月は、恐ろしい速さで流れていく雲に隠されようとしている。

その上、うるさいくらい鳴いていた虫の音もう聞こえない、これから起こる出来事に身を潜めたみたいに。

あたしは、次第に熱さを増していく右手を爪が食い込むほどの力で握り締めていた。

「冴子、逃げるよ」

あたしは、小声で冴子だけに聞こえるように言っと、冴子の手を引いて走り出そうとした。

でも、すでに回り込まれていた。

「どきなさいよ！」

あたしは、行く手を通せんぼでもするようにふさぐ眼鏡の警官を怒鳴りつけた。

「なぜわかった、継承者。」

我は、完全にこの男を乗っ取ったつもりだったのだがな」

先ほどまで人間だった男が、底知れない不気味な笑いを浮かべ近寄ってくる。

「さあね。女の勘とでも答えておこうかしら」

本当は違う。こいつらは人間だったら必ずすることをしなかった、まばたきを。

それに、あたしは覚えていた。ブラックホールのお化けの匂いを。こいつらからは、ブラックホールと同じ血の焦げるような匂いがし

たのだ。

けれど、それを敵に教えてやるほどあたしは、親切じゃない。

「ふふつ、まあいい。」

久しぶり、と挨拶するべきかな、継承者殿」

と、後ろからノツポの警官。

あたしは今、エティエンヌが教えてくれた“ゆらぎ”がひとつの大きな意思であるということを目の当たりにしていた。彼らはまるで、ひとつの生物が二つに分裂したかのように交互に話しかけてくる。

「そうね。でも、またお会いできて光栄、とはとてもいえないわ」
そう軽口を返しながらもあたしは、ずっとヤツらの隙をうかがっていた。

あたしは、何故エティエンヌがランプを手にしたとたん現れたのか知っていたのだ。“ゆらぎ”は、今日にでも邪魔者を排除するべく手を伸ばしてくるということ。

だから、エティエンヌと仲たがいで、丸腰で“ゆらぎ”と戦うことになったあたしは、ここで殺されても仕方ないけれど、冴子だけは、何の関係もない冴子だけは、命に代えても助けてやりたかった。

だが、そんな願いも空しく、なんの隙も見出せないまま、大きなケヤキの木に追い詰められてしまった。

背中を冷たい汗が幾筋もつたっていく。

万事休す――。

その言葉は、まさにこういう状態をいうのだろう。

あたしは、心の中で冴子に詫びながら、“ゆらぎ”の手が振り下ろされるのを待つしかなかった。

そんなときだった、冴子が大声で叫んだのは。

「呼びなさい、緋奈。あんたの騎士を。」

エティエンヌ・ステファン・ド・ヴィニョールを呼びなさい！」

ああ、そうだ。あたしには、エティエンヌがいたんだっけ。

彼が愛想を尽かしきってなければ、助けに来てくれるだろう。

あたしは、まだ隠れきつていない月に向かい、右手を大きく振り上げた。すぐにオリーブの徴からまばゆい光が溢れてくる。

「^{ケルビム}智天使の長、神の英雄の名を持つ聖天使ガブリエルよ。あなたの導きにより我が騎士を降臨させたまえ。

エティエンヌ・ステファン・ド・ヴィニョール。大好きだから来てええっ！」

あたしは、初めて心からエティエンヌを願った。

それにしてもこのこっぴどい呪文。絶対、嫌がらせよね。だからエティエンヌは、呼び出したくなかったのよ。

にわかに一陣の強い風が吹き、聖天使ガブリエルによって送り出されたエティエンヌが風をまとって現れた。

「遅いですよ、緋奈。わたしを呼ぶのが本当に遅すぎます！」

おいおい、久しぶりに会ったっていうのに第一声がそれですか。

でも、盛大に文句を言われても彼の出現にほっとしている自分がいて。

「そう思っただったら自分から出てきたらいいでしょうが」

あたしは、やっぱりいつもの調子で言い返していた。

「やだ、あんたたち。こんなときまで口げんかしいですよ」と、訝子。

「そうですね。そちらのマドモワゼルのいうとおりです。受け取りなさい、緋奈」

エティエンヌが渡してくれたのは、例のレイピアだった。

「えっ、これ……？」

こんなんで切ったら乗っ取られたお巡りさんたちまで死んじゃうじゃないの？」

あたしは、レイピアをすらりと鞘から抜くと尋ねた。

「いいえ。その剣は、“ゆらぎ”を滅ぼすための剣ですから人を傷つけることはありません」

えっ、そんなこといっても、こんな剣は、使ったことないんだけどな。

あたしは、すぐるような視線をエティエンヌに向けた。

それなのにエティエンヌっては何してたと思う？

金輪際、あたしに見せた事のない優しそうな笑顔で「怖かったでしょう」とかいいたながら、冴子の肩を抱いてたんだよ。

「エティエンヌ、許すまじ！」

未だかつてない怒りが、すべてを吹き飛ばしていく、初めてレイピアを手にする不安も、“ゆらぎ”に対する恐怖も。あたしは、怒りの矛先が目の前にあることを神に感謝していた。

無造作に鞘を落とすと、人少くなな公園にカランと大きな音が響き、あたしは、それを合図に両手でつかんだレイピアごと“ゆらぎ”に突っ込んでいった。

きれいな半円を描いた一撃が、眼鏡の警官の肩先をほんのわずかがすめる。

けれど、ヤツが顔をしかめても身体からは、一滴の血も流れない。

ふうん、なるほどね。

それならさくさくいかせてもらおうじゃないの。傲慢じゃないけど身の軽さには自信があるのよね。

あたしは、時代劇の侍のように正眼にレイピアを構えた。

「こざかしいぞ、継承者。ジャンヌの剣「ラピエール」などとは」「ふん、誰の剣だっというわ。あんたたちをぶち殺せるならね」

あたしは、口唇を舌先で湿らすと、“ゆらぎ”めがけてダツと走り出した。

ベンチを踏み台に大きくジャンプし、レイピアを袈裟懸けに振り下ろした。

決まった・・・！

眼鏡の警官は、操り手を失ったマリオネットのように後方へ崩れおちていった。

後一人。

あたしは、息もつかずノツポの警官との間合いをつめていった。

「思い上がるな継承者よ。」

おまえは、わたしの怖さをいまだ知らぬ」

そういうと、“ゆらぎ”は懐中電灯を放り投げ、警棒を腰からはずした。

ふん。レイピアと警棒、どっちに分があると思ってるの。

あたしは、なおもレイピアを正眼に構えたまま攻撃のチャンスをつかがった。

何の音もしない切りとられた空間。

けれど、お互いなんの隙も見出せぬまま、時間ばかりが過ぎていく。

頭の奥が、緊張の連続に耐え切れずキーンと金属製の音を立てる。それでも言い聞かせる。最初に動いたほうが敗者となるのだと。

空気が、ぶわんと音を立てて動く。

耐え切れずに動いたのは向こうが先。

銀色に光る警棒であたしの腰を薙いでくる。

あたしは、それを後方に跳んでやり過ごし・・・。
えっ！

あたしは、スローモーションになっていく視界の中で警棒が長く長く伸びていくのを見つめていた。伸縮式の警棒は、大きな弧を描き、あたしの左腰を叩いていったのだ。

もし、後一秒でも気づくのが遅れたら、したたか腰を殴られていただろう。それでも打たれたダメージは軽くない。

「痛っ・・・」

あたしは、腰をかばうように膝をついてしまった。

「緋奈っ……！」

冴子の絶叫が聞こえる。

ああ、あたしは、ここで負けるわけにはいかないんだ。あたしが死んだら“ゆらぎ”は、冴子を次の標的にするだろうから。

だが、今のままではジャンプするどころか走ることすらできない。

どうするのよ、緋奈。

この痛みだと繰り出せるのは、たぶん後一撃。
だから決める。

あたしは、レイピアをささえに立ち上がると、薄ら笑いを浮かべている“ゆらぎ”をにらみつけやった。

あたしのダメージが重いとみて勝利を確信したノッポの警官は、こちらへ向かって走り出す。

ヤツは、その勢いのまま大きくジャンプし、二メートルほど伸ばした警棒であたしの頭上から叩きつけようとした。

「死ね、継承者！」

けれど、一呼吸先にターンしていたあたしは、“ゆらぎ”が地面を打った瞬間、ヤツの右側につけ、左足から胴体を切り上げていた。

まさかという顔。

けれどもう遅い。決着は、すでについている。

「The End っでどこかしら」

あたしがそういい終えた瞬間、ノッポの警官は後ろ向きに倒れていった。

「緋奈、大丈夫？」

すぐに冴子が、駆け寄ってくる。

あたしは、冴子の肩とレイピアをささえに何とか立ち上がった。

こつちを気にする視線をふいとそらし、

「あんたにはがっかりしたわ」

あたしは、エティエンヌにそれだけをいうと、踵を返そうとした。

その瞬間だった、あたしの頬の上で大きな音が鳴ったのは。

「冴子……」

わけがわからずに目を見張ると、そこには呆れたような苛立ったような冴子の顔があった。

「緋奈、あんたはわかんないの？」

あんたの騎士さまは、あんたが戦ってる間中、ずっと心を痛めた。あたしは隣でそれをずっと見てた。今だってそう。あんたのこゝと、死ぬ程心配してるわ」

冴子は、まだケヤキの大樹の下にいるエティエンヌを指差した。

「エティエンヌ？」

あたしは、冴子に軽く頷いて見せてから、くるりと振り向き、自分の騎士に声をかけた。

すると、エティエンヌは『なんの用ですか』と言いたげな顔をする。

どうやら、あたしの騎士はとことん素直じゃないらしい。仕方ない、今日はあたしが折れてやるか。

「エティエンヌ。早く来ないとおいてっちゃうよー！」

あたしたちは、一番目の月が西に傾き始める頃、ようやく家路へとついたのであった。

再会はマチネーのごとく？

「ちょっと、人を荷物みたいに持たないでよ！」

あたしは、そう怒鳴りながら、エティエンヌの肩の上でバタバタと暴れてやった。

すると、エティエンヌは、

「大人しくしなさい、緋奈。

これからマドモアゼルのお宅と場を繋げます。

深夜にあなた方をふたりつきりで帰すわけにはいきませんからね」といった。

何、「場」って？

と、聞き返す暇などまったくなかった。

何でかというと、エティエンヌがすぐに行動に出たからだ。

エティエンヌの右手が、すいと垂直に空を切る。

もちろん何かが切れたわけじゃない。けれど、確実にそこから違う空気が生まれる。あたしはそれをエティエンヌの首にしがみついて、ぽかんと口を開けて見ていた。

エティエンヌは、そんなあたしに気づかないまま、散歩にでも出るように気軽に歩き出す、冴子の肩を抱きながら。

ぶつりっ――。

卵の薄い膜をやぶる、そんな感覚がして、エティエンヌは、空間を渡った。

たぶん渡るといっただい長い時間ではなく、気づいたら冴子んちの中庭だったといったふう。

けれど。

「おえ、気持ち悪い」

胃液が喉をあがってくる。冴子も同じように胃を押さえている。

この『場をつなぐ』っていうのは、よっぽど非常事態じゃない限り絶対にごめんだ。もう少してエティエンヌの背中に吐くところだった。

でもまったく平気だったのは、エティエンヌ。

「マドモアゼル。申し訳ありません。

今回は、非常事態でしたのでお会いすることかないでしたが、わたしが、姿を現すことを許されているのは、継承者のみなのです。

このような手段を取りご気分を悪くさせたことをどうかお許しください」

エティエンヌは、あたしを担いだまま、うずくまっている冴子に深々と頭を下げた。

相変わらずエティエンヌって冴子には優しいでやんの。マジむかつくわ。

「さて、わたしたちも帰りますよ」

そういうとエティエンヌは、あたしを担ぎなおして再び歩き始めた。

「ちょっと待って、エティエンヌ・ステファン・ド・ヴィニョール！」

ようやく復活した冴子が、エティエンヌを呼び止めた。

「あなたにお願いがあります。あなたの命を賭けてこの子を、緋奈を守ると誓っていただけませんか？」

日本人形のように黒目がちな冴子の瞳が、まっすぐにエティエンヌを見つめている。担がれてるあたしには、エティエンヌの表情は見えないけれど、彼がうなずくわけなんかない。それだけはわかる。

「Oui Mademoiselle.

わたしの全身全霊で、緋奈を守りましょう」

少しの間も置かず、答えたエティエンヌ。

「Merci beaucoup Monsieur.

冴子が、流暢なフランス語で返す。

蚊帳の外に置かれたあたしは、ひとり啞然としていた。

「そんな、どうして、嘘でしょう？」

今までのエティエンヌの態度から、そんなこと言ってもらえるわけなくて。あたしは、ずっと彼に嫌われてると思い込んでいた。

「六〇〇年前にとくに立てた誓いを繰り返すのになんの躊躇いがあるというのです」

惘然とそう答えたエティエンヌは、冴子に会釈をすると、再び場を繋いだ。今度こそ、あたしたちの狭いアパートに帰るために。

あたしは、その間一言もしゃべらなかった。っていうか、しゃべれなかったのよ。だって、嫌われているとばかり思っていたエティエンヌに「全身全霊で守る」なんていわれたことが信じられなかったのだ。

「痛いってば！」

あたしは、脇腹に触れたエティエンヌの手を叩いてさえぎった。

「緋奈、触れなければ治すことは出来ませんよ」

そういいながら、エティエンヌは、思いつきブラウスを捲り上げてくる。

「痛っ！」

冷たい手に触れられて激痛が走る。

あの後、あたしは、エティエンヌに担がれてアパートの部屋に戻ったんだけど、脇腹が痛んで一歩も歩くことが出来なくなっていた。“ゆらぎ”に警棒で叩かれた後もさんざん動き回ったことが原因だと思っただけだね。

そんなあたしを、エティエンヌは、いつになく優しくベッドに降ろして、治療してくれようとしたんだけど。なんとエティエンヌつてば、治癒のファクリティ（能力）まで持つてるっていうのよ。

まったく、さっきの「場つなぎ」といい、導きの騎士さまは、幾

つのファクリティをお持ちなことやら。

たぶん聞いても絶対に教えてくれないんだろうなあ。だってそれがエティエンヌだもん。

ってことで治療開始。

でも、ちよつと触られるだけだっていうのに、これがすつこく痛いよ。

しかも、エティエンヌってば、何の気遣いもなくブラウスを捲りあげてくるし。

そりゃ、すぐ治してもらえんというのはとってもありがたいのよ。でも場所が場所だしさ。女の子の羞恥心をわかって欲しいっていうか。

まあ、そんなことをこの男に望んでも仕方ないんだけどさ。

「これは、ずいぶんと腫れてしまいましたね」

エティエンヌは、あたしのわき腹を見た瞬間、痛ましそうに眉を寄せた。

あつ、ほんとだ。大きなこぶみたいに腫れあがっているだけじゃなく、じくじく熱を持ったように赤い。

「すぐに治しましょう！」

エティエンヌはそう言うと、いつそう真剣な顔になる。

そつと宝物を扱うにみたいに優しく触れてきて、そこからあつという間に痛みが消えていく。

あたしは、ほつと息を吐き出した。

「もう大丈夫ですよ」

エティエンヌが、ブラウスを元に戻してくれながらいう。

「どうもありがとう、エティエンヌ。」

それから・・・」

あたしは、少し言いよどみ、それでも思い切って続けた。

「それから、こないだは無神経なことを言っちゃってごめんなさい」
あたしの言葉にエティエンヌは、まるで珍獣でも見るように瞳を瞬かせた。

「今日は、やけに素直なのですね」

「失礼ね。あたしだってそういうときもあるわよ」

あたしは、ベッドから弾みをつけて起き上がり、窓際に立つエティエンヌの隣に寄り添った。

うーん、何でだかそうしたかったのよ。それにね、エティエンヌもそうして欲しいような気がしたの。

「それに……」

理由は違っても“ゆらぎ”を討ちたいという利害は一致してるんだから仲良くしたほうがいっかなと思って」

「えっと、ほんと少しよ、ほんと少しだからね」

なおもブツブツ言いながらあたしは、いたたまれなくなっとうつむいた。すべての熱が、顔に集まってる気がしたからよけいに。

あたしは、バカみたいにしばらくひとりでわたわたしていたんだけど、なんでかエティエンヌから返事が返らない。仕方ないので思い切って顔を上げてみた。

すると、エティエンヌもこっちを見ていたみたいで、あたしは、またいたたまれなくなっっそぽを向いた。

そのまま、ふたりして黙ったままでいたんだけど、いつもエティエンヌから香るセージの匂いが強くなった瞬間、ふうわりとセルリアンブルーのマントが動いた。

抱きしめられる――。

恐らく無意識の、エティエンヌが一瞬だけ浮かべた何かを受け取ってしまったのかも知れない。

けれど、そんな感情を瞬く間に消し去って、エティエンヌは、いつもの彼に戻っていた、横柄で小言ばかり言ういつものエティエンヌに。

「いいですか、緋奈。」

あんなむちゃな戦い方をしていたら、命が幾つあっても足りませんよ。

それに、レイピアは、日本刀とは違うのです」

「わかったわよ、明日からあんたに使い方を習うわよ」

あたしは、エティエンヌの説教をさえぎった。

何故だか無性に腹立たしかったのだ。

でも、自分でも何に怒っているのかわからない。エティエンヌの冷静な顔を見るとさらに腹が立ち、あたしは、ベッドに腰かけると、ペンギンの抱き枕をギュッと強く抱きつぶした。

エティエンヌは、そんなあたしを「コイツは何してんだ？」といいたげな顔で見ていたが、

「ゆっくりお休みなさい。」

それから……今日はよく頑張りましたね」と、ねぎらうように言った。

（えっ！？）

あたしは、エティエンヌのいつにない態度に驚いたが、考えてみたら彼のことは、一週間分しか知らない。

これからもっと知っていきたい。

だから、返した言葉は、とても素直なものだった。

「うん。ありがとう、エティエンヌ。」

あんたもゆっくり休んでね」

でも、エティエンヌはわずかに頷いただけで、そのまま長いこと、高窓越しに夜空をながめていたようだった。月はすっかり、西の山に隠れてしまったというのに。

再会はマチネーのごとく？

冬支度にふつくらした雀たちが軒先でせわしない。

餌を探し、雨どいをしきりにつついていたが、一羽が舞い上がると、もう一羽も誘われるように空へ飛び立ってしまった。

彼らは、餌の取れない冬、半数ほどしか生き残れないのだという。それが自然の摂理。

そう思っても可愛そうだと思う心は止められない。

こつちだつて雀に同情できるほど、余裕のある状況じゃないはずなんだけどね。

次の朝、エティエンヌに鼻をつままれて起こされた。いつもとちつとも変らない不機嫌そうに眉を寄せた彼に。

それで、半ば強制的に剣の稽古をさせられたんだけど。エティエンヌは、やっぱりめっちゃめっちゃ厳しい先生だった。

エティエンヌがいうには、レイピアは、フェンシングの「エピの剣」の元となったもので、切ることも突くことも出来るのだと。

けれど、あたしの動態視力の良さ、身の軽さを考えると、「突き」を優先させるべきで、昨晚の日本刀のような使い方は臂力の弱いあなたには向かないのだと続けた。

あたしは、ふんふんと頷きながら聞いた。だって、ごもつともだと思っただけなもの。

その結果、エティエンヌを相手に何百回も突きの練習をさせられることになったんだけどね。もう支度をしないと、学校に遅刻するという時間まで。

けれど、彼は稽古を終えてぐったりしたあたしがシャワーを浴びている隙にまたいなくなってしまった、飲みかけのフレーザーティ―をダイニングテーブルに残して。

実は昨晚、何かを思いつめてみたいだったからちょっと心配して

いたの。

エティエンヌは、どうしてか、自分がトランプに戻るところを見られるのをひどく嫌う。不思議だよね、トランプの精みたいなものだと知れているのに。

だから、あたしはエティエンヌが部屋にいても構わず先に寝ることにしていただけど。

でも、昨夜はすっごく疲れていたはずなのに、エティエンヌのことが気になって、なかなか寝付くことができなかった。

誰も寄せ付けないかのごとく背中を向け、変わらない星のささやきだけに耳を傾けながら、ジャンヌのことを想っているエティエンヌが。

そんなエティエンヌの背中を見るともなしに見ながら、あたしは、いつしか眠っていたんだけど。朝起きると、彼はいつもと同じ彼であたしは、すっかり拍子抜けしてしまった。

残されたまだ湯気の立っているカップ。

エティエンヌは、あたしの家族でもなければましてや恋人でもない。用事が済めばいなくなっても責めることなんてできないけれど。

あたしは、エティエンヌのカップをシンクに運ぶと、レバーを落とし、水をじゃばじゃばとかけてやった。このわけのわからない感情が、水と一緒に流れて、どっかへいつてくれるように。

あたしは、エティエンヌにどうして欲しいというんだろう。

刹那、冷蔵庫の上。デジタル時計のめくられる音。

ジャスト8時の文字盤にあたしは、飛び上がった。

わわわ、冴子が待ってる、冴子に怒られる。

あたしは、その言葉を頭のなかで繰り返しながら、オーバーニーソックスをあわてて履くと、待ち合わせ場所のコンビニへ猛ダッシュした。

女子高生は、なにかと忙しいのだ。いつまでも分けのわからない感情に付き合ってる暇などない。芽生えはじめたものに、思いつきリフトをして、鍵をかける。二度とひょこっり顔を出さないように厳重に。

セブンイレブンの前、人待ち顔で待っていた冴子にあたしは、「ごめーん！」

と、今まで何度繰り返したかわからないセリフをいうと、どっかの犬みたいに目をウルウルさせた。

「あんた、本当にいいかげんにしなさいよ！」

と、怒る冴子を「明日は、絶対先に来るからさあ」となだめながら思った。両親の敵を討つまで女の子でいることなど許されないとあたしは、仲良く飛び立っていった番いの雀を頭の中で思いつきDeleteすると、冴子に「期待しないでおくわ」と言われながら走り出したのだった。

私立聖藍学園

十年ほど前、市の郊外にある小さな丘を切り崩して作った新設校だ。

この学園の特徴は、外国語教育に特に力を注いでいること。そのため、帰国子女やあたしみたいに外国の血が混じった生徒が多いのが特色だ。

でも、あたしがこの学校を選んだ理由は、単に制服が可愛かっただけなんだけどね。

黒地に白のセーラーカラーのジャケット。ワイン色のミニスカートにオーバーニーソックスの制服は、「制服図鑑」のトップページ

を飾るほどだ。

あたしは、冴子とともに「2・A・H・R」と書かれたドアを勢いよく開け、いつものように「おはよう」と叫んだ。

でも、誰もこっちを振り返ってくれない。

それにいつもより当社比3倍ほど騒がしい気がする。

あたしは、机の上に鞆を放り出すと、隣で立ち話をしている工藤友香の肩をつついた。

「おはよ、友香。

ねえねえ、なんかあったの？」

友香は、一瞬びくつとなったが、こっちを振り返るとすぐ「なんだ」という顔になる。

「緋奈かあゝ驚かさないでよ！」

あんたは、聞かないほうがいい話なんだけどな。それでも聞きたい？」

「・・・・・・」

あたしが楽しくなさそうな話の展開に黙っていると、後ろから冴子が、

「まさか、この季節に幽霊の話題じゃないでしょうねえ」と、訊いた。

「さすが、冴子。実は、西城公園で幽霊を見かけたっていう話なのよ」

友香は、にやりと笑うと、冴子の肩をバンバン叩いた。

あたしは、“場つなぎ”して家に帰りたくなっていた。

だって、幽霊だけは、本当に苦手のよ。

先月の学園祭の時なんて、無理矢理入らされたお化け屋敷の中で立ったまま気絶したくらいなんだから。

あたしは、そろりそろりとその場から逃げだそうとした。

ところがもう一步のところで冴子に見つかってしまい、ノラ猫のように首をつかまれた。

「緋奈・・・・・・！」

冴子は低い声で、けれど強い調子であたしの名を呼んだ。
はい、はい。わかってますよ。

“ゆらぎ”の情報かもしれないっていいんでしょ。

冴子さまの圧力に負けたあたしは、おとなしく友香の話を聞くことにした。

「それがね、幽霊が集会を開いてるっていうのよ!」

へっ、幽霊が集会・・・!?

猫じゃあるまいし。

「そんなバカなことあるわけじゃない!」

「うん、あたしも最初はそう思ったんだけど。でも、幽霊の集会を見たのは一人や二人じゃないのよ。」

二・Bの佐藤さんとか、中等部のテニスサークルの子達とか。とにかく他の学校でも一杯いるらしいの」

友香は、興奮半分不安半分といった様子で話し続けた。

「ほら、駅前通りを市立図書館のほうに入って五〇〇メートルくらい行くと西城公園があるじゃない」

あたしと冴子は、お互いの顔を見つめた。

その場所は、昨夜、あたしが“ゆらぎ”と戦った場所だったのだ。
「それで、その幽霊達は、何をしているっていうの?」

冴子は、ゆっくりと尋ねた。

「ううん。姿は見えないらしいの。」

何人かで話しあってるような声がするから、近寄ってみるとどれもいないんだって」

そう、友香が締めくくった時だった。教室のドアががらりと大きな音を立てて開いたのは。あたしたちは、いっせいに飛び上がった。
「なんだ、山田さんかあ」

入ってきたのは担任教師の山田だった。彼は、朝のS・H・R（シヨートホ

ームルーム）を行なうためにドアを開けたのだが、あまりにもタイミングが良かった。

だが、四十年配の男性教師は、ひとりではなかった。金髪で緑の目の転校生を連れていた。もちろん、この学校では金髪の生徒もめずらしくない。毎年、たくさんの留学生を受け入れているし、生徒の中にもブロンドの髪の持ち主は、何人もいる。

それでも、クラスメート達が驚いたのは、転校生の甘やかな容姿にだろう。

美貌の転校生は、担任教師に紹介された後、教壇に立つと天使のような笑顔を周囲に振りまいたのだった。

「Monsieur Mor?chand・Viens」（モレシヤンくん。来なさい）

「Oui」

男性にしては少し高めの通る声。

ダークグレイのスーツを着た転校生は、蜂蜜色の髪に、エメラルドの瞳の背の高い青年だった。

宗教画の天使のように甘やかな顔立ちの彼は、エティエンヌを月に例えるなら太陽かもしれない。あたしたちは、息をするのも忘れていきなり現れた美青年を見つめていた。

Charles・Antoine・Mor?chand —

—。（シャルル・アントワヌ・モレシャン）

自らの名をそう紡いだ新しいクラスメートは、さも当然のようにあたしの隣に座ると、手を差し出してきた。

「Comment allez vous? Mademoiselle」

（ご機嫌いかが？お嬢さん）

あたしは一瞬たじろいだ後、スカートの裾で手をごしごしすると彼の手をとって答えた。

「Tr?s bien, Merci」（とても元気です）と。

あたしはこの時、彼が何故「Enchanté」（はじめまして）

ではなく「comment allez vous?」(いっきげん
いかが?)といったのか、少しも考えなかった。

天使は深く溜め息をつく？

今年、何度目かの木枯らしが足元で小さなつむじ風を作っている。一歩歩くたびに銀杏だの、紅葉だのの葉っぱがまわりついてきて歩きづらい。暗くなるまえに戻りたいあたしと冴子は、その中を小走りで歩いていった。

目的地は、西城公園。

もちろん『幽霊の集会』の噂を調査するためだ。

友香に幽霊と聞いた時点ですっかり腰が引けていたあたしだったが、仕方なくこうして出かけてきたのは、隣にいる怖いお目付け役のせいだ。

そりゃ、あたしだって“ゆらぎ”の情報は欲しいのよ。でも、根っから幽霊が苦手なあたしが尻込みしちゃうのを少しくらいわかってくれてもいいと思うの。

あたしは、ここまで引きずるように連れて来た冴子の横顔を上目遣いに盗み見るように見つめた。けれど、冴子の顔は恐ろしいくらい真剣で。薔薇色の口唇をきゅっと真一文字に結んでいる。

あたしはこの時、冴子は、本当に聖樹を想ってくれているのだな、ほんの少しでも聖樹に繋がる情報が欲しいのだなと、簡単に考えていたのだけれど、どうやらそれだけではなかったことを後から知ることになる。

「ねえ、冴子。エティエンヌは、“ゆらぎ”のことをこう言っていたの。

『ひとつの大きな意思であり、無数に枝葉のわかれた精神生命体でもある』って。

もし、幽霊の集会が“ゆらぎ”の仕業だとしたら、おかしくないかな。だって、彼らがひとつの意思ならコンタクトを取り合う必要なんかないもん」

あたしは、友香に幽霊の集会の話聞いてから、ずっと不思議に

思っていたことを冴子にぶつけてみた。

すると、冴子は、すうと目を細めてから言った。

「あんたの騎士様は、“ゆらぎ”を無数に枝葉の分かれた精神生命体だっただけだね。うーん。だとするとこういうことは考えられないかな？端末にあたる“ゆらぎ”が無数にいて、ホストコンピューターみたいな“ゆらぎ”に情報を送つてるとか。それに……」

冴子は、少し考え込んでいたが、すぐに続けた。

「もしかしたらというか、あくまでもこれは仮説なのよ。

“ゆらぎ”はまだ目覚めたばかりで、本来の力が出ないんじゃないかしら？」

あたしは、ごくりと喉を鳴らした。

さすが冴子である。あたしが考え付かないことを次から次へと思いつくのだから。

エティエンヌは、ジャンヌが退治し損ねた“ゆらぎ”が再び力をつけ始めたのだといった。だとすれば、“ゆらぎ”が目覚めたばかりだという冴子の説は、的を射ている。

それに、警察官を乗っ取った“ゆらぎ”が『おまえは、わたしの怖さをいまだ知らぬ』といったではないか。

「うん。あたしも冴子の説に賛成だな。“ゆらぎ”は、ジャンヌ・ダルクでさえ敵わなかった敵なんだもん。普通の状態であれば、あたしなんか勝てるわけないよ！」

あたしは、ひりつく喉の渴きを抑えながら言った。

同時にひとつの疑問が浮かぶ。

“ジャンヌは、全てのファクリティを得ていたのだろうか？”

もし、ジャンヌがすべてのファクリティを手に入れていたのにかかわらず負けたのなら絶対にあたしに勝ち目はない。

冴子は、だんだん青ざめていくあたしを見つめながら、

「なら、緋奈。“ゆらぎ”が力を取り戻さないうちに叩き潰してやればいいじゃないの！」
と、強い口調でいった。

冴子のいうことはよくわかる。頭では理解もできる。けれど、あたしの持つフアクリティはひとつきり、その上、相棒であるエティエンヌとは喧嘩ばかりだ。今のままでは到底、父さんと母さんの敵など取れるわけもない。

あたしは、自分の無力さに血がにじむほど口唇を噛んだ。

西城公園

その名は、戦国時代、小さな出城があったことが由来らしい。

隣接する『守ヶ淵』は、公園を作る際、市の名前を取って新たに『山手池』という名がつけられたのが、誰もその名で呼ぶものはない。変わらず『守ヶ淵』と呼ぶ。

何故なら、竜神に生け贄として捧げられた子供達が沈んでいるという『守ヶ淵』は、靈感のないものでも肌が粟立つほど強力な靈感スポットだからだ。

言い方を変えるなら『場』だろうか。

もし、幽霊の集会が“ゆらぎ”の仕業なら、闇の化身である彼らはこの場所と相性がいいのかもしれない。少しずつ熱を帯びてきた右手がそう教えてくれていた。

「あのさ、“ゆらぎ”を倒すにはやっぱり、エティエンヌと仲良くなつたほうがいいよね？」

「まあそうね。手っ取り早くHでもしたら？といたいところだけど、それは無理だしね」

「えっ、どうして？」

あたしは、一瞬で赤くなつた顔を悟られないように俯きながら小さな声で尋ねた。だって、実はあたしもそうするのが一番手っ取り

早いかな、なんて考えてたんだもん！

すると、冴子は、手に頭を当てながら呆れたように言った。

「緋奈。あんた、ちゃんと神原さんの話を聞いてたんでしょねえ。ファティマ第三の預言は、『ゆらぎの出現と救世の乙女』だったでしょうが。乙女ってわざわざ注釈つけるくらいなんだから、“ゆらぎ”を倒すまで処女でいろってことだと考えてちようだい。

もちろん、あたしだってあんた達が仲良くなるのはいいことだと思っし、賛成よ。相棒とのコミュニケーション不足で“ゆらぎ”に負けました、なんて笑い話にもならないもん。

でもね、あんたが“ゆらぎ”を倒したら、彼とは別れなければならないんだってことを忘れてはいけないわ。だって、この世に“ゆらぎ”がいなければ、『導きの騎士』なんて必要のないもんなんだから。いずれ別れる定めのおんたたちが深い仲になっても、お互いが傷つくだけでしょう？

それでなくてもあんたは、彼を好きになり始めてるっていうのに」
冴子の言葉に、ヘドロで底が見えないほど澁んだ守ヶ淵から渡ってくる腐臭交じりの風を手でよけていたあたしは、顎が外れるほどぽかんとしてしまった。

「あ、あたしがエティエンヌを好きって？」

確かにあたしは、エティエンヌと離れるときが来るなんて考えたことがなかった。現状じゃ“ゆらぎ”を倒せるかどうかすらわかんなかったし。

でももし、“ゆらぎ”を倒すことが出来たら、二度と会えないのだ、あの怒りんぼ魔人に。そして、あの『青の中の青』（Blue st blue in blue）に見つめてもらうこともなくなるのだ。

「そうよ。今のあんたを見てなおさら確信したわ。

あんたは、彼が好きなのよ。だって、なんとも思っていないなら『処女じゃなきゃいけない』ってところを真っ先に気にするでしよっ？」

そう言い捨てると冴子は、茫然としたままのあたしを置いてきぼりにして、守ヶ淵の反対側に出ようとした。小さな虫がわんわんと飛び交っているのさえ目に入らずに、すぐくあせったように。

あたしは、シヨックからまだ抜け出せなかったけれど、それでもあわてて冴子の後を追いかけた。

すると、大きな木の影に隠れていた冴子は、何かを探っているようで、あたしが追いつくと、しいっとばかりに口唇に指をかざした。

守ヶ淵の西側。

夕日に輝くハニーブロンド、その肩に届くか、届かないかの金髪の持ち主は、なんと、今朝の転校生『シャルル・アントワーヌ・モレシャン』その人で。あたしはますます熱さを増した右手と彼とを見比べながら、小首を傾げたのだった。

天使は深く溜め息をつく？

「そのふたり、出てきたら？」

あたしたちは、ふいにかけられた声に飛び上がった。

隣で冴子が、

「まさかあの男、あんたの匂いに気づいたんじゃないでしょうね」と、舌打ちをしている。

「ははっ。それこそまさかだよ」

あたしは、そう答えたものの、シャルルくんならあり得るかもしれないと考えていた。だって、あたしに対する懐きっぷりがものすごかったんだもん。

普通、人間に対して懐くなんて言葉は、あまり使わないものだけど彼だけは例外。シャルル・アントワーヌ・モレシャンだけは。

今朝、彼がどっかり腰を下ろしたあたしの隣の席は、遅刻した某男子生徒のものだったんだけど。シャルルくんは遅れて登校してきた男子に『まさか、僕と緋奈の仲を引き裂くなんて無粋なことじゃないよね』と、強烈なエンジェルスマイルで脅かしやがったのだ。

もちろん、登校してきた男子生徒は、すごすごと引き下がり、空いてる他の席に移っていった。

その後もシャルルくんは、一事が万事そんな調子で、一日中あたしの傍にべったりとへばりつき、転校生をめずらしがるクラスメートをまったく寄せ付けなかった。

クラスメートたちはみんな、あたしたちを昔からの知り合いか何かだと誤解したと思う。本当はバリバリの初対面だっていうのにさ。でも、シャルルくんに迷惑を被ったのは、あたしだけじゃなかった。冴子もだ。

冴子は、休み時間の度、『幽霊の集会』の話をしようとあたしのところに来るんだけど、シャルルくんが邪魔され続け、やっと話すことができたのは、お昼休み、しかも女子トイレの中だった。まあ、

いくらシャルルくんがプチストーカーでも、女子トイレまではついて来れないものねえ。

冴子は、トイレのドアを閉めるなり、

『まったく、信じられないわ、あの男!』と、ぷりぷりと怒っていた。

あたしも冴子の言葉に大きくうなずいた。

日本に不慣れな転校生だと思うから許してるけど、初対面の相手に恋人同士のようにされるのも、何度も手にキスされるのもまっぴらゴメンだ。

もしかしたら、フランスという国はエティエンヌといい、シャルルくんといい、セクハラ男を量産しているところなのかしら? あたしはフランスの女性に少しだけ同情してしまった。だから、冴子のシャルルくんに対するイメージが今世紀最悪になったとしてもそれは、彼の自業自得で同情の余地はまったくくない。

「あら。よくわかりましたわね。

モレシャンくんの前世は、犬だったのかしら?」

と、皮肉たつぷりに冴子。

実は、冴子には腹を立てると、言葉遣いが妙に丁寧になるという癖がある。まあ、彼女はもともといいところのお嬢様だしね。

すると、シャルルくんは、

「そんなに見てますってオーラ出されたら、誰だって気づくよ」と、さもうつとうしそうに溜息をついた。

ついでにあたしにウインクをして「緋奈が可愛がってくれるのなら、犬になるのもそう悪くはないけどね」と、続けた。

冴子は、木の影から出ると、蚊でも追っ払うようにシャルルくんのウインクを手ではたき落とした。

「それにしても、モレシャンくんは、どうしてこんなところにいら

っしやるのかしら？」

ああ、能面のように無表情な冴子から飛び出す敬語がめちゃうちゃ怖い。ここまで冴子を怒らせた人間がいまだかつていただろうか、いいやいない。どうやらシャルルくんは、冴子に最大の天敵と認識されたらしい。

だが、賢い冴子が、相性が悪いだけでここまで警戒するのはありえない。たぶん、シャルルくんを“ゆらぎ”関係者と疑っているのだろう。

そりゃ、このタイミングでの転校生だし、あたしには男の子に一目ぼれされる魅力なんてちっともないから、疑って当然かもしれないけどさ。

でも、あたしは、彼が“ゆらぎ”ではないと確信していた。彼に“ゆらぎ”にどうこうされるような心の間があると思えないし、いい意味でも悪い意味でも自分というものをしっかり持つてるプライドの高い人だと思うから。

「僕の緋奈をこんなあぶないところに行かせるのが、心配だからに決まってるだろう！」

シャルルくんが腹立たしげに答えた、その時だった。

少しおさまったふうに思えた木枯らしが周囲の木をざわざわと鳴らし、守ヶ淵の水面を揺らしはじめたのは。

と同時に、あたしの右手が焼け付かんばかりに熱を帯びていく。「ふふつ。どうやら彼は、僕たちに自分の存在をアピールしたいんだね」

と、シャルルくん。

相変わらず、あたしにさっばい笑顔のままで、緊迫感のカケラもない。

「なんのことっててるの、シャルルくん？」

「この池の主のことだよ、緋奈。」

竜神だとか言われてるそうだけど、どうやら、何百年も人間に悪

意を向けられた結果、違うものになっちゃったみたいだね」

シャルルくんは、『久しぶりに見た子犬が大人になってた』と、話すみたいになにこしながら言った。

「モレシャンくん。あなた、頭がおかしくなったんじゃないでしょうね。あなたのお話だと竜神が本当にいるみたいだに聞こえますけど？」

冴子は、つんとすまし、奇想天外なことを当たり前のように話すシャルルくんをバカにしたように言った。けれど、本当は冴子だって感じているはずだ、天敵の存在を。たとえ、人間がどんなに万物の霊長と偉ぶっても、生きとし生けるものである限り、動物の本能から逃れられない。

そう、捕食される恐怖からは。

あれだけ強く吹いていた風が不意に止まって、三人の間に緊迫した空気が流れたすと、冴子は、暗闇に怯える子供のようにぶるぶると震えた。

「へえーそんなに震えているのに竜神が存在しないと思ってるんだ？」

シャルルくんは、冴子の怯えた様子を全く気遣う様子もなく言った。彼は、どんなときでもあたし以外の人間に容赦する気は、こればかりもないらしい。

「ちよつと。こんなときに質問に質問で返すのは止めてちょうだい！」

刹那、『守ヶ淵』の水面にざざと大きな波が立つ。

冴子は、ひいと声をあげて、あたしの肩にしがみついた。

そりゃあたしだって、この状況は気味が悪い。けれど、幽霊相手じゃないとわかった以上それほど恐ろしくはない。家族をいっぺんに失う恐怖を味わったあたしにとって、喰われて死ぬことなど大して怖くはないのだ。

「まったく、きみは気の短い人だな。」

だからいったらう、竜神は、いないんだって」

シャルルくんは、『竜神は』のところに特に力を込めた。

彼はおそらく、こういいたいのだらう。竜神は、神の地位から墮ち、人の敵にまわったのだと。

いにしえ、竜神が本当に生贄を要求していたかどうかはわからない。だが、神として畏敬されているうちはまだよかったのだらう。

けれど気象さえ予想できる現代。竜神が洪水や日照りを起こすなど信じられるものは一人もいなくなり、結果、「生贄が捧げられていた淵」という噂のみが一人歩きした。そして、皆がこの場所を忌むようになる。

例えをあげるなら、『丑の刻参り』がわかりやすいだろうか。

ただ、とんかんと藁人形に釘を打つだけならば何も起きるわけではない。そこに恨みや憎しみの気持ちを込めることが呪詛となり、相手を陥れるのだ。

簡潔に言えば、皆が長い間、『守ケ淵』を気持ち悪いと思ったことが竜神を神の地位から墮としたのだといえる。

そして、おそらく竜神は――。

「冴子、シャルルくん。帰らう」

あたしは西の山に姿を隠していく夕日を見上げるといった。

全ての魔物が活動をはじめ逢魔ヶ刻になる前に『守ケ淵』から去らねばならないと、あたしはわかりすぎるくらいにわかっていた。それに『守ケ淵』に棲むものがあたしの予想通りのものならば、今は牽制だけで襲ってこないはずなのだ。何故なら、彼らは夜の闇にしか現れることが出来ぬ定めを負っているから。

天使は深く溜め息をつく？

「アレはなんだったのかしら、緋奈？」

冴子は、『緋奈を送っていく』と強硬に主張するシャルルくんを、『あなたのほうが送り狼になりそうですから結構ですわ』と、ばつさり切り捨てると、あたしの腕をつかみ、だつと走り出した。

そして、二〇〇メートルくらい走り、シャルルくんがついてこないのを確認すると、先ほどのセリフをおもむろに切り出してきたのだ。

アレとはもちろん、プチストーカーのシャルルくんのことではなく、守ヶ淵の水面を騒がせたヤツのことだろう。

実はあたしは、迷っていた。先ほどの冴子の怯えた様子から、もう彼女を巻き込むべきではないのかと。いや、本当はずっと前から迷っていた。

冴子が行方不明の弟、聖樹を心配してくれるのはうれしい。けれど、その一事だけで彼女を“ゆらぎ”退治に加えるのはどうなんだろう。

今のあたしのフアクリティでは自分の身を守ることさえ危つい。

何か事があった時、冴子を守る事など到底出来はしない。それは警察官をのつとつたゆらぎの時で身に試みている。

それに、おそらくエティエンヌは、あたしというジャンヌの末裔を守るためなら何の躊躇いもなく冴子を切り捨ててくだろう。ならば、冴子には、このまま何も知らせないほうがいい。

あたしはそう結論を出すと、

「ああ。そういえばシャルルくん。竜神が変なものになったとかいってたね。でもさ。ゆらぎが乗っ取るのは人間だけだし、幽霊の集会と“ゆらぎ”は関係ないんじゃないかな？」と、首を傾げながらいった。

まったくの嘘である。

“ ゆらぎ ” が竜神を餌食にしたとあたしの右手は教えているし、
聖天使ガブリエルの徴は、“ ゆらぎ ” にのみ反応するのだから。

しかも、徴の熱は、警官のときと比べものにならないほどに高い。

それが教えることは、なおさら冴子を巻き込むことなどできない。

すると、冴子は、

「 あんたが急に帰ろうと言い出すから、アレの正体が何かわかったのかとおもったわ！ 」と、声を尖らせた。

「 しかも、あんた。めずらしく真剣な顔したし 」

「 あっ、ごめん！ 」

今日は、朝からエティエンヌにめちゃくちゃしごかれるわ、シャルルくんへばりつかれるわで、すっごくお腹空いてきちゃってさあ

あたしは、お腹を押さえると、悲しそうな顔を冴子に向けた。お腹が空いているのは事実だからこれは演技でも何でもない。

冴子はとたん、ものすごくいやな顔をした。

こんな緊張感のないヤツと親友になったのは、ものすごい失敗だったのじゃないかしらん、という顔つきである。

「 あんたには本当にあきれちゃうわ。 」

でも……

冴子は、そういうとあたしの顔を穴があくほど見つめた。

そして、数瞬後。

「 あんたがあたしのことを心配して何も教えないのはわかるから、これ以上何も聞かないわ。それに、あんたが力を合わせなくてはならないのはあたしじゃなくてあんたの騎士様だもの。あたしは、それを忘れていたのかもしれないわ 」 といった。

どうやら、あたしの演技は、ばれられたらしい。さすが冴子である。

けれど、あたしは、冴子の言葉に頷くだけにとどめておいた。

彼女の性格からすれば、ひとたび知ってしまえば関わらないでは
いられないのだから。

「それにしてもシャルル・アントワーヌ・モレシャン。本当に失礼
で、胡散臭いわ！ ゆらぎだって、あの男に比べればずっと紳士よ」

冴子は、もう一度後ろを確認すると、吐き捨てるようにいった。

まだ五時だというのにあたりはすっかり真っ暗で、ようやく公園
を出られたことにほっとした冴子の吐く言葉は、実に辛らつだった。

けれど、胡散臭いというあたりはまったく同感だ。

守ヶ淵で会ったのは、あたしたちの会話からだと思うが。

『どうやら、何百年も人間に悪意を向けられた結果、違うものにな
っちゃったみたいだね』というセリフにいたっては、ただの勘のい
い人間では済まされない。あたしの中でゆらぎではないが要注意人
物というくりに“シャルル・アントワーヌ・モレシャン”が入
れられたのはいうまでもない。

「確かに」

あたしは、冴子の言葉に頷いてみせてからしんと冷え始めた
夜空に浮かぶシリウスを見つめた。

木枯らしはとうに止んでいたが、白色の星がゆらゆらと揺れるよ
うに瞬く。

- 1.5等星。全天で一番明るい大犬座のシリウスは、『焼き焦
がすもの』の異名を持つ。あたしは南天の星空を見上げながら、シ
ヤルルくんがまるでシリウスのようにあたしのこれからを焼き焦が
していくような予感がしてならなかった。

『うちに寄ってご飯を食べていきなさいよ』という冴子の誘いを断
って、あたしは、そうそうにアパートに戻ることにした。冴子の小
父さんも小母さんもいい人だけれど、今は正直、誰かに気を使うこ
とが面倒くさい。

『ごめん。昨日、カレーを作りすぎちゃったから、今日は家で食べるよ』

大鍋にカレーをたくさん作ったのは事実だったし、あたしはバイバイと冴子に手を振った。

冴子は、『残念ね』と言ってからにんまり笑い、『くれぐれも処女は死守してね』と、言ってくれやがったのだ。

あたしは思わず、持っていたバックで冴子を叩いていた。それでも冴子は、にやにやと笑いながら、コンビニの角を曲がっていったけれど、ひとりでアパートへの道を歩き始めると、どうしてかドキドキが止まらなくなってしまった。頭の中を『あんたは、彼が好きなのよ』という言葉が廻り始める。

あたしは、冴子の誘いを断ったことを少しだけ後悔しながら、二〇二号室のカギを開けた。

ドアを閉めて、ふふと笑う。

部屋の中は、真っ暗でエティエンヌがいる気配なんかこれっぽっちもない。昨夜、焚いたラヴェンダーのお香とカレーの匂いが混じりあい、なんともいえない妙な臭いを醸し出しているだけだ。

あたしは、手探りで玄関のスイッチを見つけ出すとONにした。すると、その手をいきなりつかんだものがある。

『きゃあ』という言葉を読み込むと同時に照明がつき、恐ろしいほど整った顔がドアアップであられる。狭いアパートの一室に不似合いな世界で一番美しい男が。

けれど、エティエンヌの顔は、怒りというらしきと哀しみ、そんなものが一緒くたになった感情で満ちていた。

「えっ？」

ふいに抱きしめられる。

こうしてエティエンヌの力強い腕に抱きしめられるのは二度目だ。

初めて逢った時と、今と。

あたしは、張り裂けんばかりの胸の鼓動が伝わらなければいいと

願いながら、彼の名を小さく呼んだ。

「エティエンヌ？」

エティエンヌは、なおもぐいぐいと抱きしめながら、

「あなたをまた、失ったかと思ったのです」と、絞り出すような声でいった。

『？』と思ったが、それでもエティエンヌの背中を幼子にするようにゆっくりと撫でてやる。それを何度も繰り返すとようやく落ち着いたのか、ぼつりぼつりと話し始めた。

「緋奈の右手が熱を帯びたのに気づき、あなたの気配を追っていました。けれど、最高に熱くなったのを境に消えてしまい。

ああ、六〇〇年、生きてきて初めてです。ルールに縛られたこの身がこれほど厭わしく思えたのは」

エティエンヌがもう一度、痛いほどあたしを抱きしめた。

ああ、そうか。エティエンヌは、あたし以外の人間の前に姿を現すことができない。冴子のときは、あたしが死にそうだったから、特別だったんだろうけど。今回は、シャルルくんもいて、しかも昼間の人目につくときでは、どんなに心配でも、場つなぎしてくることが出来なかったのだろう。

「ふたりが公園を出た辺りから、感じ取れるようになったのですが、それでも、あなたの元気な顔を見るまでは、落ち着かなかったのです」

エティエンヌの「青の中の青」(Blue st blue in blue)の瞳は、彼の感情を映したようにグレイに翳っている。こんな動揺したエティエンヌを見るのは初めてだった。彼は、いつも高飛車で、怒ってばかりだったから。

あたしは、自分がいかに彼に心配をかけたかを知り、エティエンヌをぎゅっと抱きしめ返すと、何度も「ごめんね」と謝罪の言葉を繰り返したのだった。

あかつきにみた夢？

むかしむかし、小さな川と小さな森に囲まれた小さな集落。

田んぼには、青々とした稲が育ち、村の中ほどの空き地では、子供たちの甲高い声が響く、なんとも幸せな風景だ。

その中心には、一人の美しい青年。

久しぶりに村へやってきた青年に、子供たちは、自分の相手をしてもらうのだとばかりに、青年の袖を競いあうようにひっばっている。

「主様、遊ぼうよ」

「主様、お話して」

「今日は、どんなお話をしてくれるの？」

どんなに子供たちにもみくちやにされても幸せそうな青年は、この村を流れる川の主にして竜神で、長い白い髪と澄んだ水色の瞳の持ち主だった。

若き竜神は、子供たちの騒ぎを静めるように両手を上げると、穏やかな笑顔のまま言った。

「今日は、いつぞやカラスに聞いた話をしてしんぜよう」

子供たちが、いつせいにきやあきやあと歓声を上げる。

「それでは、むかしむかし、あるところに……」

と、いつものごとく話を始めようとした青年だが、柿の木の後ろに小さな少女の姿を見つけた。

「キサナ、そなたも来るがよい」

青年が優しく手招きすると、おそろおそろといった様子で少女が近寄ってくる。少女、キサナは、他の村に嫁いだ娘が産んだ子供だったが、母が流行り病で亡くなったため、昨年、この村の祖父母の元に引き取られたのだ。そのためどこか遠慮がちに暮らしていた。

だが、竜神は、このキサナという少女を、格別に思っていた。村人は、やっかいものとさげすんでいるようだが、彼女の弱いものを

愛おしむその心根は、雨上がりの緑に輝く木の葉のように、きらきらと輝いていた。もちろんそれは、神である青年にしか見えないものであったが。

「それでは始めよう。」

むかしむかしあるところに、おじいさんとおばあさんが住んでいました。

おじいさんは山へ柴刈りに、おばあさんは川へ洗濯に行きました。おばあさんが川で洗濯をしていると、ドンブラコ、ドンブラコと、大きな桃が流れてきました……」

竜神が、身振り手振りを交えて桃太郎の話始めた。

桃から生まれた桃太郎は、お伴を従えて鬼ヶ島へ渡り、人々を困らせていた鬼の退治をする。そして、無事、鬼を退治すると、故郷で待つ祖父母の元に宝を持ち帰り、幸せに暮らす。そんな完全懲悪な話が子供は大好きなのだ。きらきらした目で青年の話に聞き入っている。

「……みんな幸せに暮しましたとき。おしまい」

青年が、そう話を終えると、子供たちは、一斉に大きくため息をついた。自分たちも主人公になり、鬼と戦った心持ちになったからだ。

「俺も桃太郎みたいに強くなりたいな」

「俺も」

「俺も」

男の子たちから口々に声が上がった。

だが、一人の子供が、

「俺は、強くなるより、大きな桃を腹いっぱい食べるほうがいいな」というと、みんなが腹をかかえて笑った。お腹が空いたが口癖の彼は、他の子供より小太りだったからだ。

お話に満足した子供たちは、青年にお礼を言うと手を振り、それ

その家へと帰って行つた。ひとりキサナを残して。

「一緒に来るか？」

青年が、キサナにそう問うと、キサナはにっこり笑って頷き、青年の手をぎゅつと握ってきた。ふたりは、兄妹のように仲良く並んで、ひととき大きな藁葺屋根の家へと向かつて歩き始めた。賢いキサナは、竜神が村へどんな用事でやってきたのか知っていたのだ。

今日も空に雲一つない。

例年なら梅雨入りして久しいこの時期、天は、ほんの一粒の雨も恵まなかった。空は、どこまでも青く、雲ひとつ浮かんでいない。

青年は、美しい眉を寄せた。

「今日はまた、ことに暑いのだ」

隣にいるキサナが、神妙な様子でうなずく。

何故なら、この集落は、たいそう貧しいのだ。青年が、竜神としてやってくる前は、幾人かの子供たちが、冬を越えられず餓死したほどに。

領主から課される年貢が重いのはもちろんだが、この辺りは、火山灰が降り積もってできた土地ゆえ、土地の滋味が少ない、稲の実りも乏しいのだ。

今でこそ、青年の加護により、餓死する子供こそいないが、それでもほんの少しの気候の変化が命取りになるのは変わらない。

どうだんつつじの生け垣を抜け、魔よけの鈴がかかった入り口で主の所在を問うと、すぐに白髪の老人が現れた。老人は、青年のおとないにあわてたように腰をかがめた。

「村長よ、雨は、いまだ降らぬか？」

「はい、もう二月ほど一滴の雨も降ってはおりませぬ」

村長は、頭を上げると、とつとつとそう答えた。

「すまぬのう、我がもそつと力の強い竜神であれば、雲を呼び、雨を降らせることができようものを」

若き竜神は、自身の力のなさを心底申し訳なさそうに言った

年老いた村長は、すぐに大きく首を振り、

「いいえ、主様。あなた様ほど我らを愛してくださる神は、他におりませぬ。皆が、あなた様にどれほど感謝しておりますことか」と答えた。

心からの言葉だった。

若き竜神は、力の足りなさを恥じている様子だったが、かほど自身为民のために力を尽くしてくれる神が他にいようはずもない。しかも、彼が、現れてから二十年、村の暮らしは、格段に良くなったのだから。稲穂は、重さを増し、家畜は、たくさんの子を産んだ。その上、彼がもたらした紫色の芋は、栄養豊富で保存が利き、食料が不足する冬にはまことにありがたいものだった。それらの知識を他の神々の間を巡り、頭を下げて教えを乞うてきたものだと思われる、なおさら尊敬の念は強くなる。

村の子供が彼にまわりつくのは、大人たちが彼を敬愛していればこそなのだ。

だが、今年の天候は、齢七〇の村長であっても例のないものだった。常ならごうごうと音を立てて流れる竜神の川も、常の半分ほどに水量を減らしていた。村はずれの沼など、すでに干上がっているありさまである。

もし、このまま雨が降らねば、稲は、穂が出る前にすべて枯れてしまうだろう。

「お前の気持ちはありがたいが、我は、雨雲を呼びぬできそこないの竜神、このまま雨が降らねば、お前たちの生活が成り立たぬと知っていても何ひとつ力になれぬ」

青年は、そう言うときく苦く笑った。

およそ、竜神というものはすべからず、雨雲を呼び、雨を降らすことができるもの。強い力を持つものなら嵐さえ呼びよう。だが、彼はなぜか、雨雲を呼ぶことができなかった。雲が天にあれば、雨

を降らすことはできるが、空に雲がなければ一粒の雨も降らすことができない。

それは、若さ故か、生まれ持った力が弱いのかわからなかったが、自分のような力のない竜神に支配された土地に住む村人が哀れでならなかった。

青年は、乾燥に強い作物をできうる限り植えるように言い置くと、村長の家を後にした。後ろで村長が何か言いたげにしていたが、わざと気付かないふりをして。隣でキサナが青年の手をひっぱっても気づかないふりをして。

そして、七月（今の暦だと八月）も半ばを過ぎ、あれからひと月が経ってもいっこうに雨は降らなかった。

若き竜神は、天にわずかな雲があれば、雨を降らそうと幾度も試みるのだが、雲が薄すぎざるためか少しの雨も降らない。

仕方なく、自身の矜持を捨て、仲間に自分の土地に雨を降らせてくれるように頼んだのだが、仲間は済まなそうに首を振るばかり。

何故なら竜神には、自身の土地以外に雨を降らせてはならないという掟があったのだ。

それでも彼は、あきらめず仲間の竜神の間を巡り、雨を降らせる方法を訊きまわったが、その結果は芳しくなかった。

万策尽きた、このままではわが民の多くが、冬を越えられず餓死するだろう。

そんな中、酷暑が元で年老いた村長がこの世を去った。

新しい村長には、村長の息子が選ばれたのだが、彼は、前の村長と違い、急進的な人物だった。いや、急進的というより想像力に欠ける自己中心的な人物だった。しかも、若くおろかで、竜神が来る以前の餓死者が出ていた時代を知らなかった。

「このままじゃ、おらたちは、干上がっちゃう」

白く濁った酒をおとなしく飲んでいた若者が、いきなり杯を床に叩きつけた。

村長の通夜の晩、女、年寄り、子供は、明日もあるからと早々に家路についたが、男衆は、まだ飲み足りないのか、その多くが村長宅に残っていた。

彼らも初めは、通夜にふさわしく穏やかに酒を飲んでいたのだが、誰かがなんとはなしに言った「暑くてたまらねえな」という言葉をきっかけに雰囲気が一変した。彼らのいつも腹に溜めていた不安がいつせいに噴出したのだ。

「稲がいつもの半分しか育ってねえ」

「おらんとこもだ」

「水が少なえからな」

「川の水もそろそろ干上がるんでねえべか」

「うちの力カアは孕んどるんだ。この分じゃ……」

「そうだ、このままじゃ……」

誰かが口を開くたびに、不安が澱のよう^{おり}に降り積もっていく。

それでも、彼らは、飢饉と言う言葉をあえて使わなかった。だが、新しく村長になった若者は、おろかにもその禁句を叫んでしまった。

「このままじゃ飢饉になるぞ！ このままじゃ皆が飢え死んじまう！」

場が水を打ったように静まる。

それだけでなくとも水はせき止められ、今にも溢れそうになっていたのだ。新村長の言葉は、皆の心にあった堰^{せき}をあっけなく吹き飛ばしていった。もうこの場に酔っ払いなどひとりとしていない。

「んじゃ、どうすればいいだ」

そう訊ねた男の顔は、どす黒く、その瞳はらんと輝いている。いや、気付けば男衆のすべてが今にも笑い出しそうにゆがんだ顔を

していた。

彼らはみな、同じ結論を出したのだが、卑怯にも言い出しつへの責任を負いたくはなかった。

「おまえたちも山向こうの村の話は聞いているべ。同じことをおらたちがやったところで誰も責めることなんかできねえ！」

新村長がわめいた。

一昨年、山向こうの村では、日照りの際、乙女を竜神に捧げた。

竜神に捧げたといえは聞こえはいいが、ようは少女をひとり、人身御供として川に沈めたのだ。

「そうだ、他の村だってやってるんだ、おらたちが責められることはねえ」

「そうだ、村長の言うとおりだべ」

それは、名実ともに若者が村長として認められた瞬間だった。

彼は、言い出しつへの責任を負った上、皆が喉から手が出るほど欲しかった『免罪符』を与えたのだから。

それからの彼らの行動は、素早かった。

とある少女の家に押し掛けると、祖父母の制止を振り切り、彼女を引きずり出した。

「やめてくれ、その子は、娘の形見なんだ！」

老人が悲鳴を上げ、老婆が土下座をせんに頼みこむのにも一瞥もくねず、いや、邪魔とばかりに蹴り倒し、男たちは、少女の髪をわし掴むと、ずるずる引きずっていった。

「やめて、あなたたちについて行くから、おじいちゃんとおばあちゃんにひどいことしないで！」

夜闇に響き渡る、少女特有のかん高い泣き声。その声の主は、あのキサナだった。

彼らが、キサナに狙いを定めた理由は、彼女の父親がよそ者だったから。彼女を庇護すべき父親がここにいなかったから。いや、もしかしたらそれだけではなかったかもしれない。村一番の美人を

よそ者にとられた、その醜い妬心がキサナに向けられたのだろう。

三十人ばかりの男衆は、キサナをしばらく歩かせたのち、いきなり突き飛ばした。優しい竜神が、子供たちのために昔がたりをしてくれた場所です。

「もう万策尽きたんだ、おめえを生贄にするしかねえ」

村長の息子の、今までキサナをよそ者とさげすみ、無視し続けた男の、キサナにかけた初めての言葉だった。キサナは、言われた言葉に驚くより、この男が、自分に声をかけたことにびっくりしていた。

キサナは、八月に入っても雨が降らなかったとき、自分の運命を悟っていた。いや、山向こうの村で自分と同じ境遇の少女が、人身御供にされたという話を祖母から聞いた日からだったかもしれない。

とうとうこの日が来てしまった。

キサナは、数十本のたいまつが照らし出す、急ごしらえの祭壇の前に立たされていた。何故か不思議と恐怖はなかった。ただあの優しい竜神が、自分の死を知ったらどんなに悲しむだろうと、そればかりが気にかかった。

「あおぎねがわくば 天をおさめ 地をおさめ

よろずのことものを おさめたもう

天神に あまつかみ 祈りささげたてまつる」

村長の息子が、神主よろしく祝詞を唱えると、男衆が、

「雨ふらしたまえ 雨ふらしたまえ

雨ふらしたまえ 雨ふらしたまえ」

と、声を揃える。

「神よ、嵐の神、須佐之男命すさのおのみことよ。この生贄を受け取り、雨ふらしたまえ」

村長の息子が、顎をしゃくると、男衆がキサナの両肩を羽交い絞め

にした。

そして、キサナは、白刃が己の胸に突き刺さっていくのを時が止まったように見ていた。

「主様、ごめんなさい……」

遠ざかって行く、その意識の底でキサナは、自分の死が竜神に優しく伝わり

ますようにと祈っていた。

あかつきにみた夢？

「主様、ごめんなさい……………」

「キサナ？」

水底で眠っていた竜神は、かすかに聞こえる少女の言葉に揺り起こされ、ぱちりと目を開けた。その言葉は、まるでうたかたのように、幾度も幾度も繰り返され、彼の心の琴線に触れては消えていく。

「まさか……………」

水にほんのわずか混じる血の匂い。

竜神は、竜形からあわてて人形になると、川土手へ駆け上がった。朝まだき、白々とした霧もやの中に葦のとがった葉先だけが浮かぶ。

その葦の群生の中に、見えたのは、紅のかたまり。

「キサナ……………」

いつぞや、母が子供の頃に着ていたもののだと、顔に気色を浮かべ、くるりと回って見せてくれた山吹色の着物は、いまやその片鱗もない。赤一色だ。

竜神は、葦をかき分けると、少女の血まみれの体をかき抱いた。

「なんということだ……………」

時間が経ったためか、それとも体からすべての血が失われたせい
か、少女の体は、ひどく冷たかった。つい、こないだではなかった
のか、その小さな、温かい手を握つてともに歩いたのは。

「キサナっ、キサナっ、キサナっ……………」

竜神は、肩を震わせて泣いた。

何故、この罪もない少女が死ななくてはならなかったのか、我の力の無さゆえか。

「うおおおおおっ……………」

若き竜神は、生まれて初めて声をあげて啼いた。

自分の身が、ひどく厭わしい。神と呼ばれながら、人一人助けら

れぬこの身が。だが、それにしても……。

ぼつりぼつり。

三月ぶりの雨が、彼の肩を濡らす。

竜神の涙は、雨雲を呼び、竜神の怒りは、雷雲を呼んだ。

やがて、雨は嵐となり、村中を吹き荒れた。

キサナが生贄にされたことを知った村人たちは、この嵐を竜神の怒りと恐れた。

なんとという恩知らずなことをしたのかと、年寄りたちは男衆を責めたが、やってしまったことはどうしようもない。女衆がキサナを手厚く葬ると、ようやく嵐がおさまった。

そして、三日三晩、吹き荒れた嵐が去り、外に出た村人が見たのは、満々と水をたたえた田であった。男衆は、自分たちのやったことは間違っていないかったと、胸を張った。

だが、嵐がおさまり、水が引いても、竜神の川からは魚が取れなくなってしまった。もちろん、若き竜神が、村に姿を現すこともない。心あるものはそれを嘆いたが、男衆を表だって非難することが出来なかった。

『もし、日照りが続いていたら、一体、幾人の命が失われたのか、それを一人の犠牲で済ませてやったのだから、責められるいわれはない』と、開き直られれば口をつぐまざるを得なかったのだ。

それ以来、愚かな村人は、日照りの度に、生贄を捧げ続けた。竜神の涙が、雨を降らし、嵐を呼ぶことを知っていながら。

竜神は、水底でわずかに尾を振った。

体が重かった。年を経るごとに増えていく重りに体が絡めとられ

ていくようだ。

（我は、いまだ死ねぬのか）

彼は、生きることには飽いていた。竜神として生を受けて三百有余年。人ならとづくに骨となつてゐる年月だ。

（神であるこの身が、ひどく厭わしい）

彼が、幾たりの生贄を受け取つたのか自分でも覚えきれなくなつた頃、その身は、僅かばかりしか動かなくなつてゐた。生贄の捧げられた川を不吉と思つた人間が、数多あまたいたせいか、向けられた負の心は、彼の体と心を蝕んでいった。

かつて彼は、力のない竜神であつた。

だから、そのせいで村人は思い余つたのだと、それは、仕方のないことだつたのだと、何度も自分に言い聞かせてみた。けれど、キサナや十数人もの少女を殺され、それでも守護を続けた彼に、村人は何をしたか。

人間を恨んではいけないと幾度考えようと、いや、ここまでされて恨まずにおれるものがいようか。

彼は、人を愛し、共にあらうと最大限の努力をした。それなのに、それなのに……。竜神は、いまや神ではないものに堕ちようとしていた。

そんなある日、この日の本と呼ばれる国が、大きな戦いに巻き込まれ、しばらく経つたある日。

彼の前に、暗く凝こつた闇の化身が現れた。闇の誘いは心地よく、闇と共にあることは、安らぎであつた。

「我らの名は、“ゆらぎ” 原初の闇より出でて人を滅びに向かわせる存在。竜神よ、我らと共にあれ、さすれば、そなたは、これ以上傷つくこともない」

彼は、頷いた。

『ああ、我は、もう何も考えたくない。我という存在をお前に明け渡そうではないか』

憎しみとともに・・・。

竜神の大きな体は、またたくまに闇に覆われた。
わずかばかり彼の手をひっぱるような感覚がしたが、竜神は、それに気付かないふりをした。

三百年前、村長の家の前で、年老いた村長とキサナが、彼の身を案じたのに気付かないふりをした、あの日のように。

あかつきにみた夢？

「そんなの絶対ダメだよ！」

あたしは、そう叫ぶと、鼻水を垂らしながら泣いた。

明け方に見る夢は、正夢なのだと父さんが言っていた。なら、さつきまで見ていた夢は、本当にあったことなんだろう。

『竜神は、“ゆらぎ”に憑依されたのではない、自分の意思で“ゆらぎ”になったのだ』

そこに同情すべきどんな理由があっても。

だとするなら、あたしが竜神様にしてあげられることは、ただ泣くことだけだ。たぶん、彼は、あたしの同情なんかいらないだろうけど。だからこれは、一方的な押し付け、同じように大事なものを失った仲間としての。

人は、大事な人を失った時、その人を失ったことが一番悲しいのだと考える。けれど、あたしは、それはちょっと違うんじゃないかなと思う。人は、大事な人を失ったことより、これからその人と積み重ねて行けたらう時間を失ったことが一番悲しいんじゃないかな。

例えば、あたしなんかなら、父さんが作ってくれたご飯を、みんなでわいわいしゃべりながら食べる、そんな今まで当たり前で過ごしてきた時間を奪われたことが一番腹立たしい。たぶん竜神もそうだったんじゃないかな？。

そりゃあの時代だから、楽しいことばかりじゃなかっただろうけど、キサナや村の人たちとこれから積み重ねていけたはずの時間を奪われたことが、一番悲しかったんだよ、きっと。

だから、竜神が、その時間を奪ったものを憎むのは、当然だ。あたしが“ゆらぎ”を憎むのと同じように。

あたしの時間は、父さんと母さんを失ったときに止まってしまった。傷口もぱっくり口を開けたまま、少しも癒えちゃいない。

あたしは、“ゆらぎ”を滅ぼせるなら、自分の持つているすべてを犠牲にする。そして、父さんと母さんと聖樹と、もう一度四人で暮らせるなら、この世界のすべてと引き換えることすら厭わない。

そう、あたしは、本当に本当に、自分の家族が大好きだった。

あんまりにも当たり前にあったから気付かなかったけれど、家族が共にいなければ自分がどこに立っているかわからなくなるほどに。

「竜神様、ごめんなさい」

あたしは、あなたに同情はするけど、あなたを滅ぼすことをためらったりはしないよ。もし、あなたが“ゆらぎ”に乗っ取られただけなら、こんなあたしでも助けてあげられたのかもしれない。でも、“ゆらぎ”そのものになっちゃしまったあなたは、まぎれもなくあたしの敵。だから、この夢を見せたヤツの策にうまうま乗って、あなたに手心を加えたりできないんだ。

だから……。

「本当にごめんなさい」

あたしは、ベッドの上に正座すると、守ヶ淵のほうへ向かってぺこりと頭を下げたのだった。

「緋奈、何をしているのですか？」

あたしが、ベッドの上で正座をしているのを見たエティエンヌが呆れたように言った。

ははは、そりゃ朝っぱらから正座して、ぺこぺこ頭を下げたりや変に思うよね。

「えっと、これは何と言うか。ほら、日本人的な朝の挨拶よ。」

「今日も一日がんばりまーす的な？」

あたしは、言い訳にならないような言い訳を、デリカシーのかけらもなく現れてくれやがったエティエンヌを、横目で睨みながら言っただ。

まったくノックの一つでもしろっていうのよ。まあ、この男にそんなことを言ったところで『あなたはどこを見て、女性として意識しろというのですか？』とかなんとか言い返すに決まっている。だから、賢いあたしは、黙っている、かなりむかつきはするけれど。

それなのに、エティエンヌは、あたしが睨んでるのなんかどこ吹く風で、食器棚からティーセットを取りだすと、当たり前のようにお茶を入れ始めた。

「それは、それは。どうやらわたしの知らぬ間に変わった習慣が出来たようですね？それとも妙な宗教にかぶれましたか？」

「どんな宗教よ！」

あたしは、即行ツツコミを入れた。まったく日本人が宗教にいい加減だからってなめてんのか。

「さあ、この国には、多くの神がいっぱいいますからね。唯一の神を信じるわたしにはわかりかねます」

エティエンヌは、涼しい顔でそう言うと、トロピカルピーチテイーをおいしそうに飲んだ。

「ふん、日本人はね、心が広いのよ。だいたいひとりの神様しか許さないってただけ心が狭いわけ？さすがあんたんとこの神様だわ」
あたしは、ベッドから降りると、コーヒーメーカーのスイッチを入れながら、へへんと笑った。

日本対フランスの宗教戦争勃発である。あたしたちは、いつものごとくにらみ合った。

でも、次の瞬間、エティエンヌは、ふいに表情を緩ませ、あたしの頭をポンポンと叩くと、食器棚から新しいコーヒークップを出してあたしの前に置いてくれた。

「頬に涙の跡がありますよ、何かあったのですか？」

ああ、もう、まいっちゃう。そこをつっこまれたくなかったから宗教戦争を始めたのにさ。まったくKYな男だよ。

「ええっと、なんだか悲しい夢を見ちゃったみたい」

あたしは、曖昧に答えた。別に隠したかったわけじゃないんだけど、どうやって説明したらいいのかわからなかったのだ。

「明け方の夢は、正夢になると言います。もし、話すことで楽になるのならいつでもお聞きしますよ」

優しい言葉に、また鼻水が垂れそうになる。だって、エティエンヌが父さんと同じことを言うなんて想像もしてなかったんだもん。それに、昨日からやけに優しいしさ。

そんなわけで、単純なあたしは、鼻をぐずぐずいわせながら、夢の話ですっかり話してしまった。ついでに夢を見せたのは“ゆらぎ”なんじゃないかということも。

エティエンヌは、あたしの話を聞いた後、しばらくじっと考え込んでいたけれど、

「^{あかな}緋奈の考えは、おそらく間違っていますよ。ジャンヌも“ゆらぎ”と同化してしまったものを解放したことはありません。おそらく不可能だったでしょう。

だからと言って女性のあなたに、罪悪感を持つなど言うのは、無理かもしれませんが、こればかりは割り切るしかありません」

と、Blue st Blue in blueの瞳を翳らせながら言った。

ああ、あたしと竜神様以外にもいたのだ。他に代えられないものを失くし、傷つきながらも生き続けなければならぬ人間が。

刹那、あたしは、冷たい彼の手を取って、『つらかったね、わかるよ』と慰めてあげたくなってしまった。

でも……自分のためじゃなくエティエンヌのために、それはやめておいた。あたしたちは、傷をなめ合うために一緒にいるんじゃない。“ゆらぎ”を倒すために一緒にいるんだ、ということを忘れちゃいけないのだ。

「Le consentement・soldat compa
non.（了解、戦友さん）」

あたしは、そう言つと、おどけて敬礼をした。

『soldat compagnon（戦友）』という関係が今の
あたしたちには、一番ふさわしいのだから。

繰り返されたゲーム？

> i 3 4 5 3 9 — 4 2 7 2 <

左から、緋奈、エティ、冴子、シャルル、竜神様。 イラスト：
彩都めぐり

「もう、立つてられないよぉ。学校に行ったら確実に死んじゃうよぉ！」

あたしは、セブイレブンで待っていた冴子に、おんぶお化けよろしくもたれかかると、ぐじぐじと泣きごとを言った。

あの後、乙女ゲームで言うなら、一気に親密度が上がったかに見えたあたしたちだったけど、エティエンヌの鬼教師ぶりもまた上がっていて、あたしは、ぴくりとも起き上がれなくなるまでしごき抜かれたのだ。絶対、アイツってDSだね。それとも・・・ツンデレ？

「よしよし、継承者稼業も大変ね。RPGのレベル上げより地道じゃないの」

冴子は、あたしの頭を撫でながらそう言つと、ばいっと口の中にチョコレートを放り込んでくれた。

「ありがとう、冴子。マジ生き返るわぁ」

口の中でチョコが、ほわんととろけていく。

(うんまい〜〜〜！)

Meltykiss 抹茶味は、レッドゾーンになっていたヒットポイントを三割ほど回復してくれた。まあ、あたしのヒットポイントなんて薬草でMAXになっちゃうくらいなもんだけどね、トホホ。あたしは、冴子の愛とチョコで回復し、聖藍学園行きのバスになんとか乗り込んだ。国立病院が途中にあるため、いつも爺ちゃんと

婆ちゃんで満員のバスに、なんとか二人分のスペースを確保すると、あたしたちは、すぐおしゃべりを始めた。

「今日もあの男、来ると思う？」

「シャルルくん？　まだ転校二日目なんだからそりや来るでしょう隣でちっ！と舌打ちの音。」

冴子さん、そのお嬢さん顔で舌打ちってマジやめて欲しいんですけど。っていうか、そこまでキライですか、シャルルくん？

「そいえば、昨日、エティエンヌが変なことを言ってたな。あたしたちが、シャルルくんと一緒にいたときだけ、あたしの気配がたどれなかったって」

そうなのだ、昨夜のエティエンヌの話は、突き詰めればそういうことになる。あんまりにもエティエンヌが心配してるから話しそびれてしまったけど、気配がたどれなかったのはたぶん、シャルルくんが一緒にいたからじゃないかな？

「えっ、アレは、ただの変態じゃなかったの？」

「変態って、冴子さん……」

「初対面の女性に付きまとう男は、普通、変態力テゴリーに分類されるわよ！」

冴子は、妙にうれしそうな顔になってそう言い放った。

あのさ、変態力テゴリーって何？

もう、あたしは、何も言い返せなかった。

しかも、話が微妙にずれてるのはいいとしても、冴子が、何度も『変態』と大声で言うもんだから、あたしたちへの注目度は、切なくなるくらい高かった。

あたしは、冴子の肩をつんつんについて、回りを見るように言うてから、

「シャルルくんがどういうカテゴリーに属するかは知らないけど、一般人と言うカテゴリーには入らないかも知れないよ」と、声をひそめた。

エティエンヌは、あんなドSでも『導きの騎士』、その力を抑え

るなんて普通の人間に出来るわけがない。でも、彼は“ゆらぎ”と思えないしな。あたしは、「うーん」と考え込んでしまった。

「ってことは、あの変態を人間でも“ゆらぎ”でもない第三の勢力って思ってるわけ？」

「うん。偶然、たどれなかったという可能性は、捨てきれないんだけど、なんというかシャルルくんってマジうさんくさいんだよね」

「そうでしょう？ あの変態は、変態な上に、めちゃくちゃうさんくさいのよ！」

げっ、そんな大声で、鬼の首でも取ったかのような言わないでよ。もう、このバスに乗れないじゃないの、しくしく。

でも、シャルルくんをけちゅんけちゅんにけなす冴子は、いつもより元氣そうで、上気した顔は、いつもより三倍（当社比）いきいきして見えた。

だから、あたしは、親友の言葉に「そうだね」と笑って答えた。

『次は、終点、聖藍学園前、聖藍学園前』

バスのアナウンスが、高校生ばかりの車内に響く。

あたしたちは、後輩たちに続いてバスを降りると、2・A・H・Rのドアを勢いよく開けた。

「おはよう！」

けれど、いつも賑やかな教室は、お通夜のようなだった。

「どうしたの？」

冴子は、輪の中で一番暗い顔をした工藤友香に声をかけた。

でも、友香は冴子の顔を見るなり、わっと泣き出してしまい、代わりに隣の優奈が答えた。

「うん、それがね。友香んちの里香ちゃんが昨日から行方不明なのよ」

「友香の妹の？」

「うん。塾の帰りに、友達と神明町の稲荷神社まで帰ってきたらしいんだけどね、そこから行方不明なのよ」

「お稲荷さんからうちまで百メートルもないの・・・人通りだつてあるし・・・だから・・・でも、こんなことになるなら迎えにいけばよかった・・・」

友香は、そう言つと、手に顔を伏せて泣きじゃくつた。

彼女の家は、実は父子家庭なのだ。

一昨年、交通事故で母親を亡くしてから友香は、母親代わりになつて、年の離れた妹の面倒を見ていた。だから、友香は、悲しいほど自分を責めてしまうのだ。

でも、聖藍学園は、私立の進学校、他の高校と比べものにならないくらい厳しい。友香は、勉強と家事と妹の面倒と、頭が下がるほど頑張つていた。

二月前、あたしが両親を亡くした時も、何度もあたしのアパートを訪ねてノートのコピーを置いていつてくれた。

「あんたは、悪くない！ここにいるみんなは、あんたが頑張ってきたのを見てるんだからね」

あたしは、喉を詰まらせながら言つた。

「そつだよ！」

優奈も言葉を合わせた。回りにいた女子たちも鼻をぐずぐずいわせながら、うんうんうなずいている。

「ありがとう、緋奈。みんなもありがとう」

あたしたち、2・A・H・Rの女子一同は、放課後、里香ちゃんの写真を手にはうぼうを探しまわつた、里香ちゃんの手掛かりを求めて。けれど、その結果は、芳しくなかった。いいや、芳しくなかったところではない。山手市で行方不明になったのは、里香ちゃんひとりだけじゃなかったのだ。

なんと十二人もの少女が、一晩で姿を消していた。

繰り返されたゲーム？

あたしが、一步も歩けないほどくたくたになって帰ると、エティエンヌがあつたかいミルクティーを入れて待っていてくれた。

『導きの騎士』さまは、どこに情報源を持っているんだか、すでに子供たちの行方不明事件を知っていた。

「ありがとう」

白い湯気の立つマグカップになみなみ注がれたミルクティーは、エティエンヌの気持ちと同じようにとつてもあつたかで、あたしは、しばらく無言でミルクティーを飲み続けた。

ふんと思いついてテレビのスイッチを入れる。

すると、ちょうど九時のニュースが始まったところで、見慣れた神明町の稲荷神社が液晶ディスプレイに映っていた。

『昨夜、九時頃より、埼玉県山手市緑が丘に住む小学五年生の女の子が、消息不明となっています。関係者の話では、こちらの稲荷神社で友達と別れてから行方が知れないとのこと。しかも、山手市では同様の事件が一二件も起きており、山手警察署では、それぞれの事件の関連性について調べています』

取材記者と思われる中年男性が、口から唾を飛ばしてしゃべっている。

続いて、録画と思われる映像が流れる。

山手警察の前、行方不明になった少女たちの家族が搜索願を出しに来たのを次々捕まえては、コメントをせがんでいるものだ。

先ほどの記者が、母親と思われる女性たちに、

「ご心配ですね。何か手がかりを得られましたか？」

「何故、子供さんひとりを夜遅くに外出させたんですか？母親の監督不行き届きといった意見もあります」

「ご主人は、お子さんの行方不明についてなんとおっしゃっています」

すか？」

と、記者は、少しの気遣いも感じられないインタビューを繰り返している。母親たちは、自分を責めてげっそりやつれているというのに。

いつも思うことだけど、マスコミは、自分たちを何様だと思っているのか。彼らは、大衆の知る権利を振りかざして被害者さえ蹂躪する。

だから、今までテレビをつけたことがなかった。備え付けの液晶テレビが置かれていたが、一度もスイッチを入れる気にならなかった。

あたしは、無性に腹が立って、主電源をoffにした。それだけでは飽き足らず、コンセントからぶちつと抜いてやる。

あの光景は、何の罪もない母親たちが責められている光景は、二月前の父さんと母さんの通夜の晩と重なる。あの時、彼らに責められていたのは、あたしだった。

『何故、あなただけが生き残ったのですか？』

『ご家族を全員亡くされてこれからどうされるのですか？』

『ご両親が殺されたことに何か心当たりはありますか？誰かに恨まれていたと言ったような』

『お父様は、警備関係のお仕事をされていたそうですが、やはりそちらの関係で恨まれていたのではありませんか？』

（やめてええええっ………！）

あたしは、耐えきれず、耳をふさいでうずくまった。

何故、これ以上傷つけられなくてはならないのか。彼らは、親を亡くした子供にかける一かけらの情も持っていないんだらうか？

おそらく………持っていないのだ。彼らは、その後もうずくまって泣いている子供に、知る権利と言う名の暴力をふりかざし続けた。

（そこまで言うなら、死んでやるわよ！）

あたしは、自暴自棄になり、雨の中を走りだそうとした。

けれど、そんなあたしを抱きとめた腕があつた。小柄な老人がマスコミの前に立ちだかつていた。

『わたしは、紫堂家の顧問弁護士の神原と申します。

あなたがたは、親を亡くした子供に何をしているのですか。それ以上、紫堂家を侮辱するなら、あなた方を名誉棄損で訴えますよ！』戦後を生き抜いてきた男の一喝だった。

あたしより小さな老人の気迫は、彼らを圧倒し、怒鳴られた男どもは、すごすごと尻尾を巻いて逃げて行った。

今のあたしには、エティエンヌも、冴子も、神原さんもいる。

けれど、あの母親たちには、誰かいるのだろうか、自分をかばってくれる存在が。自分を責めて、他人に責められて、あの時のあたしのように自棄にならないといいのだけど。

「きつと誰かが支えになってくれますよ」

エティエンヌが、あたしの心を覗いたように言った。

「うん……」

ああ、あたしは、永遠にこの男には敵わない。あたしのことをあたし以上に知っているような気がするから。

「ほら、鼻をかみなさい。若い女性がいつまでも鼻水を垂らしているものではありませんよ」

あたしは、エティエンヌが渡してくれたティッシュを受け取ると、音を立てて鼻をかんだ。

「えへへ」

なんだか気恥しくなって笑ってみせると、エティエンヌは、今までになく優しい顔をしていた。

「少し眠るね。一時間くらいしたら起こしてくれる？」

その後、エティエンヌが何と返事をしたのかわからない。あたしは、意識を飛ばすように眠ってしまったから。

『このままお眠りなさい』と、答えようとしたエティエンヌの目に、すでに寝息を立てている緋奈の姿が映る。

「今日は、朝から大活躍でしたからね」

エティエンヌは、テーブルにうつぶせて寝ている緋奈を抱きあげると、ベッドに運んでやった。

「六〇〇年とは、ずいぶん待たされたものです」

ラ・イールことエティエンヌ・ステファン・ド・ヴィニヨールが、ジャンヌ・ラ・ピュセルの末裔の守護についたのは、大天使ガブリエルに、ジャンヌの転生を約束されたからだ。

ジャンヌが火刑にあった後、彼女が今度こそ幸せな一生を送れるなら、その傍らに自分がいなくてもいいと思っていた。でも、もう一度彼女に会いたいと思う気持ちは、年を経るごとに大きくなり、膨れ上がった気持ちは、勝ち目のない戦にさえ追い立てるほどに育ってしまった。

だから、ガブリエルの提案を聞いたとき、一も二もなく飛びついた。だが、今、その短慮を海よりも深く後悔している。

（だいたい、一目会えたら満足だなんて、どこの大バカ者が考えたのだ）

彼女に再会した途端、自分の血は一瞬で沸騰した。キスして、抱きしめて、自分だけのものになりたい。自分がもはや人間ではないのだと、思いたさなければ、その場で抱いていただろう。それほどに愛しい娘。

「あなたは、また重荷を背負わされて、それでも人のために戦うのですね」

先ほどまで、テレビを観ながら泣いていた少女の姿が、エティエンヌの脳裏によみがえる。

自分は、このお人よしの少女の傍らで同じ人間として生きていく
たかった。愛して愛されて、長い人生をともしたかった。

だが、それは、もはや impossible なのだろうか。

エティエンヌは、涙の跡が残る緋奈の頬に手を伸ばすと、ゆっく
りかがみこんだ。その赤い口唇に口づけるために。

初めは、触れるだけ、次は長く……。

緋奈の口唇は、ジャンヌと同じように温かくて柔らかかった。

「これは、マーキングです。」

あなたは、昔から変な男を寄せつけますからね」

エティエンヌは、もう一度噛みつくような口づけをすると、すっ
くと立ち上がった。

「おやすみなさい、緋奈」

その言葉と同時に照明が消え、一人の少女を愛する男の姿も闇に
沈みこんでいった。

繰り返されたゲーム？

「ねえ、エティエンヌ。一度でいいからあたしと仕合ってくれない？」

あたしは、エティエンヌが頷くのを待つて、練習用になっている棒を一本渡すと、自分用にいつもより少し短い棒を手にした。

「それでは、行きます」

短い棒を正眼に構え、切っ先をエティエンヌの咽喉元に向ける。

双眸は、最前よりエティエンヌの目を捕らえて離さない。

じりじりと後退しながら、じっと見つめあう。

お互いがお互いの隙を見出そうと、全神経を傾ける緊迫した時間。じわりじわりと円を描くように、互いを中心に動いていた二人の足がふいに止まった。

エティエンヌが、いきなり大上段から打ち込んできたのだ。

あたしは、その剣戟を一步退いて躲すと、すぐ左半身を翻し、横一文字になぎ払った。力に余裕のあるエティエンヌは、それを真正面から受け止めた。

乾いた木を打ち付け合う大きな音が、いつもの川原に響き渡る。

何合か、あたしが交わし、エティエンヌが受け止めることを繰り返した。

だが、あたしの剣の極意は、『先んずれば人を制す』だ。

あたしは、エティエンヌが、大上段に構えるより先に、身を縮め、彼の懐に入り込んだ。これでエティエンヌの長い得物は、封じられたことになる。

そして、立ち上がりざま、切っ先を咽喉元に当てれば、The Endだ。

「やれやれ、今回は、わたしの負けですね」

エティエンヌは、おどけて頭の上に手を上げた。

あたしは、ふふと笑って、Vサインを返してやった。

「これは、なんという剣術なのですか？」

「うーん、紫堂家流小太刀かなあ？うちの父さん、武道の達人だったんだよね」

そうなのだ、うちの父さんは、あれで要人のSPなんぞをしてたから、あたしと聖樹には、多少武道の心得がある。といっても護身術くらいにしか役立ってないけどね。

「この戦法は、すぐ読まれちゃうから一回こっきりだし、身が軽いダメだから、女性向けなんだよね」

と、あたしは続けた。

「そうでしょうね。」

そう言えば、あなたは、わたしの次の手を読んでいたのですか？」「ううん、違うよ。っていうか、三手先まで読んでたっていうのが正解かな？

相手の目を見て、先の先の先まで読む。これが、日本式の剣術なんだ」

あたしは、Blue st Blue in blueの瞳を覗きこむように言った。エティエンヌが、あたしの言いたいことをわかってくれるといいなと願いながら。

「日本式……」

あなたは、まさか？」

「うん、実は、ジャンヌのレイピアは、使いづらいんだ。」

そりゃ、ラピエールじゃなきゃ“ゆらぎ”を倒せないのは知ってるよ。だから……ジャンヌの剣を小太刀に打ち直せないかなと思って」

「打ち直すのですか、ジャンヌの剣を？」

エティエンヌの双眸がまたたくまにグレイに翳った。

「うん、レイピアみたいな両刃刀は、日本人には使いづらいんだよ。これから強い敵と戦うつのに、レイピアじゃ確実に後れを取っちゃう……」

あたしは、エティエンヌのご機嫌をうかがうように、おそろおそろ言った。

エティエンヌが、ジャンヌの剣を打ち直したいなんて話を嫌がるだろうとはわかっていた。

けれど、あたしにフェンシングは向かない。向かないというより、もう小太刀の型が出来ているから覚えづらいというのが本当のところなんだけど。それに、今からフェンシングを覚えるより、ある程度覚えている剣術を使った方が効率がいい。これから強い敵と戦うならなおさらだ。

「緋奈は、レイピアより小太刀がいいと言うのですか？」

「まあ、ぶつちやけて言えば、そういうことになるかな？」

それに、あたしは、ジャンヌの末裔かもだけど、日本人なんだ。父さんもじいちゃんも“侍”だったしね」

これを言えば、たぶんエティエンヌは傷つくだろう。でも、この問題を解決させなければ、あたしたちに勝ち目はなくなる。

「かも、ではありません。あなたは、間違いなくジャンヌの子孫です。六〇〇年間、あなた方を見守ってきたわたしが言うのですから間違いありません」

「うん、それはすつごく感謝してるよ。」

でも、エティエンヌ。あたしは、ジャンヌの子孫だけど、ジャンヌじゃないんだ。彼女とは違う人間なんだよ。だから……」

「いいえ、あなたは、ジャンヌです！ このわたしが、六〇〇年、待っていた、あなたは、ジャンヌの生まれ変わりなのです」

エティエンヌは、あたしの言葉にかぶせるように言った。

「えっ……！！」

あたしは、そう言ったきり、次の言葉が出ない。

もちろん、エティエンヌの言葉を『あんたの勘違いじゃないの』と笑い飛ばすことは出来た。でも、ことジャンヌに関する限り、エティエンヌが間違っていることはない。彼は、ジャンヌのためにだけ存在

繰り返されたゲーム？

いつものセブンイレブンの前。

あたしは、待っていた冴子に「お待たせ」と声をかけた。

「どうしたの、あんた？」

冴子は、ぎょっとしたようにあたしの顔を見つめた。

自分でもわかってる、かなりひどい顔をしてるってことは。エティエンヌと別れて帰ってから、一時間半は泣いてたもん。

「大丈夫だよ、冴子。あたしは、大丈夫！」

あたしは、二の腕に力こぶを作って見せると、親友の肩を抱いてバス停に向かった。

今日は、何が何でも学校へ行かなくちゃいけない、あたしに出来ることなんてほんの少しだけど、それでも、やるべきことから逃げてはいられないんだ。

「緋奈、あんた、変ったわね」

冴子は、さっきまで痛ましそうに見ていた顔に笑みを浮かべて言った。

あたしが「そうかな？」と返すと、ちょうど向こうからバスがやってきた。

けれど、いつものバスは、回送かと見間違っくらいガラガラだった。

「すつごく空いてない？」

「うん、やっぱりあの事件の影響かな」

五人くらいしか乗ってないバスは、怖いくらい静かで、あたしと冴子は、後ろの席に並んで座ると、声をひそめて話し始めた。

「緋奈、あんた、騎士さまと何があったの？」

うつ、冴子さんってば、いきなり訊きますか？しかも、なんでエティエンヌ又限定なんすか？

でも、あたしは、普段と変わらずに答えることが出来た。

「それがさ、あたしつてば、ジャンヌ・ダルクの生まれ変わりなんだつてさ。笑っちゃうよね。なんの冗談かつちゅうの！」

「でも、あんたは、泣いたんだよね？それに、冗談だとも思わなかった、そうでしょ？」

「そうだよ！ あのエティエンヌが、ジャンヌLOVEのエティエンヌが、ウソつくと思えないじゃん」

あたしは、ムキになって言い返した。

「それで、あんたは、気付いたわけだ」

「うん、そうだよ、気付いたよ。あたしは、あの怒りんぼ魔人を好きだつて。ううん、もうエティエンヌのいない毎日に戻れないって思うくらい好きだよ。」

でも、あたしにだってプライドがある。あたしの後ろに他の女を
見てる男と一緒にやっていけないんだよ！」

また鼻の奥がツーンと痛くなる。

それに、あたしは、エティエンヌにあたしだけを見て欲しかった
それが、どんなに我が儘なことだと知っていても。

「うーん、あんたの言うことは間違つてないけど、騎士さまも不憫
よね。あんたは、彼が六百年も待つてたジャンヌの生まれ変わりな
わけでしょ？」

冴子は、妙にエティエンヌに同情的だった。

「そりゃそうだけど、あたしとジャンヌは、まったく別の人間だよ。
あたしは、日本人だし、神のお使いでもないしね。」

だいたい、大天使ガブリエルの“ガ”の字も見たことないわ！」

あたしがそう言いきると、冴子は、呆れたようにため息をついた。
「あんたたちつて前世でもそうやってケンカばかりしてたような
気がするわ」

ははは、それだけは、賛成です、冴子さん。

あの女心のこれっぽっちもわからないエティエンヌとうまくいく
女性なんて、今も昔もいるわけないもん。

錯綜する想い？

「おはよう」

あたしたちが、教室のドアを開けると、クラスメートは、全員、集まっていた。他のクラスは、ガラガラだっというのに。

ふふ、たまにいるよね、いつも遅刻ギリギリに来てるくせに、台風とかだと妙にはりきって来ちゃうヤツ。うちのクラスは、どうやらそんな変わったヤツの集まりらしい。

こうして、クラス中が朝っぱらから雁首揃えてるのは、昨日の二ユースを見たか聞いたかして、友香のことが心配でたまらなくなっただけに違いない。母親から『今日は、学校を休みなさい！』って言われたるうに。

「まったくまいっちゃう。昨日の夜、みんなからじゃんじゃんメールが来てさ。うちのお父さんなんか感激して泣いちゃったよ」と、友香が言う。

はは、そういうあんたもさっきから泣き笑いしてるじゃんか。

友香から聞いたところによると、友香親子もあのインタビュの時、警察にいたらしい。ふたりは、入り口で茫然としてただけど、『父子家庭じゃもつといじめられるかも』と考え、裏口からこっそり抜け出したという。

そんな世間の冷たさをひしひしと感じてた友香親子のところへ、クラスメートからばはんメールが届き始めた。どのメールも『大丈夫？』とか『俺はおまえの味方だ』とか『明日は俺もお前の妹を探すぞ』とか書かれていて、友香のお父さんは『友ちゃん、世間つてめちゃくちゃ優しいじゃないか』と、男泣きに泣いたらしい。

そりゃね、事件は、少しも解決してないし、友香親子は、昨晚も一睡も出来なかったと思う。でも、ひとりじゃないとわかったただけで、人は、強くいられる。結局、人を救うのは、人でしかないん

だよ。

あたしは、そんなことを昨日より晴々した友人の顔を見て思った。

「みんな、座れ。SHRやるぞ！」
ショートホームルーム

担任の山田さんが、前扉を開けて入ってきた。みんなが、バタバタと、自分の席に着く。

全員が座ったのを見届けた山田さんは、クラス中を見まわすと、にやりと笑った。

「このクラスは、大バカ者の集まりだな！」って言いながら。

「「ひつどーい」」

と、何人かが返したけど、それでもみんな、笑ってる。山田さんの大バカ者が褒め言葉だと知っているから。

「だが、今日から当分の間、学校は休みになる。皆さま、お揃いのとこスマンがな。」

そして、これから言うことは、大切だから耳の穴、かつぽじって聞けよ。

いいか、絶対に一人で出かけるな、特に女子はな。帰りのグルーブ分けは、委員長に頼めるな」

山田さんは、お気に入りの冴子委員長様に顔を向けると、パチンとwinkした。

何人かの女子が「山田さんってば、キモーい」とはやしたてる。

山田さんは、わざとらしく咳をしてから、

「いいか、SHRが終わったらすぐに帰るんだぞ。すぐにだぞ！」と、大きな声で言った。

「はい！」と、みんなが小学生みたいに返事をする。

そうして、週番が号令をかけ、SHRは終わったのだが、山田さんは、いったん教室を出たくせにすぐ出戻ってきた。

「いいか、お前ら、本当に帰れよ。」

お前たちに何かがあると、俺が嫁さんに怒られんだかな」と、頭

をぼりぼり掻きながら。

あたしたち2・A・H・Rの生徒のほとんどが、山田さんを好きだ。このうだつのあがらない、イケメンっておいしいの？と言いたくなるような中年教師が。

なんでかと言うと、人間として日本人として大切なことを教えてくれたからだ。

まだあたしたちが入学したての頃、ひとりの男子が「古文や漢文なんて大人になって役立つと思えねえのにさ、マジうぜえよな」と、うそぶいた。

確かに、古文や漢文だけじゃなく、微分積分も三次関数も、その道に進まなきゃ必要になると思えない。ちよつと嫌な気分がクラス中に漂った。

すると、ちよつとそこに入ってきた山田さんが、

「原田、お前が今してる勉強はな、土台なんだよ。新聞ひとつ読むにも政治経済の基礎知識がなきゃ少しも面白くないだろ。」

お前らが、将来、勉強したいものが出来たとき、基礎知識ってやつがどうしても必要なんだよ。それを今、習ってるんじゃないのか？それにな、俺はこう思ってる。学校は、勉強するだけのところじゃなく、勉強の仕方を習うところじゃないかってな」

と、言ったのだ。

そして、山田さんは、こうも続けた。

「俺が今、言ったことは、すぐにはわかんないだろうよ。」

でもな、お前らはだいたい、理屈を考えすぎんだよ。何も考えないで無心にやってりゃ、後で理屈がついてくる時もあんだらうが！」
教室中がしーんと静まりかえった。

あたしたちは、山田さんの言った通り、本当のところはよくわからなかった。でも、いい大学や会社に行くために勉強しろ、と言わなかった教師は、彼が初めてだった。

それに、山田さんは、日本史の教師だが、教科書をほとんど使わ

ない。

「こんなん読んできると、日本人をやめなくなっちゃうからな」と言
って。

あたしが今、自分を日本人と誇れるのは、山田さんがいてくれた
からだ。

たぶん、みんながそうだと思う。彼は、人間としての、日本人と
しての土台を、決して子供扱いせず教えてくれた、一人の大人とし
て。

だから、みんな、心の中で謝っていた、彼の言いつけに背くことを
でもね、山田さん、あたしたちは、あなたの生徒だから、仲間が
苦しんでいるときに見捨てたりできないんだよ。

「みんな、集まって！」

冴子が、ひと声かけると、みんなが教壇のまわりに集まってきた。
副委員長の島田くんが集まってきた順にプリントを渡している。

「プリントには、グループ分けとそのグループの担当する地区が大
まかに書かれています。印がついてるのがそのグループのリーダ
ーです。」

リーダーは、何もなくても三〇分ごとに島田くんにもメールするこ
と。終了時間は、一六時厳守。集場所は、山手中央図書館です。
何かわからないことがありますか？」と、冴子が声を張り上げた。

冴子ってば、こんなもんいつの間にか作っただろ？

友香と島田くんを除く三十六人が九つのグループにきちんと分け
られている。あたしの名前には 印。メンバーは、優奈とこないだ
までお隣だった榊原くん……シャルルくんだった。

「それでは、搜索を開始します」

「緋奈、よろしくね。邪魔者がいるけど、僕は、ちつとも気にしな
いからね」

と、シャルルくんが相変わらずKYな発言をしたところであたし
たちは、そろって校門を出たのだった。

錯綜する想い？

あたしは、制服の上から白いだぶだぶのカーディガンをはおった。カーディンをはおったのは、防寒のためはもちろんだけど、この生徒かを分からなくするためだ。うちの制服、なにげに目立つからね。他の三人も、あたしと同じようにセーターをはおったり、ジャージを重ねたりしている。

「さてと、どこからはじめますか？」

あたしは、デイバッグから冴子にもらった緑が丘の地図をこそこそ取り出すと、みんなの前に広げた。

すると、さつきからスマホで何かを検索してた榊原くんが、

「僕たちのエリアには、里香さんが失踪した稲荷神社があります。

やはりそこから彼女の家までを重点的に調べてはいかがでしょうか？ 街というのは、時間帯によって様子がまったく違うものですからね」と、提案してくれた。

「そうだね、朝と夜じゃ歩く人も全然違うだろうしね」

あたしは、榊原くんの意見をそう補足すると言った。

さて、ここであたし以外のメンツを少し紹介しとくね。

まず、さつきからスマホを後生大事に離さない榊原征爾くんは、アーミーオタク。特に戦闘機系のオタクらしく、よく机の上で「Jウィング」という雑誌を広げている。こないだ、横須賀に「ロナルド・レーガン」が就航した時なんか、学校を休んで見に行っていた。

ただ、彼のオタク仲間、男子ばかりなせいか、女子とコミュニケーションを取れなくなっちゃったらしい。だから、榊原くんがあたし以外の女子と口を聞いているところをあまり見ない。

成績は、冴子に続いて学年二位、本人いわく東大理？に進んだ後、防衛省に入るのが夢なんだという。ついでにいうと、シャルルくん

にあたしの隣から追い出されたのは、彼。

優奈こと、新宮優奈は、名前が示す通り、神社の家の娘だ。

けれど、彼女本人は、ぜんぜん日本的でないというか、明るい茶色の髪をゆるいおさげにした現代的な娘だ。渋谷あたりにショッピングに行くと、よくモデルにスカウトされるほど愛らしい顔立ちをしているが、本人は、まったく芸能界に興味がない。早く結婚して、いいお母さんになるのが夢だとよく言ってる。

成績は、あたしと同じで中の上といったところ。友香とは大の仲良しで、よく友香の家へ家事のヘルプに行っている。

シャルルくんのことは……あたしもよく知らない。

フランスから留学しに来てることと、外面がいい割には、人を寄せつけないふうなところがあるってことくらいかな。

成績は、たぶんすごくいいんだと思う。うちの学園に中途編入するには、かなりの学力を要求されると聞いたことがあるから。

あたしと優奈は、ちょっと難がある男子二名を連れて、いつものバスに乗った。稲荷神社に一番近い緑が丘一丁目で降りると、すぐに神社へ向かう。

住宅街の一角にある稲荷社は、小さいながらも森があって、隅々まで手入れが行き届いていた。

「ここは、東松山の箭弓稲荷神社のお末社なんだ」と、神社の娘が言う。

「んじゃ、神主さんにお話を聞いたりできないの？」

あたしは、少しがっかりしたように訊ねた。

「うん、まあ。でも、うちのお祖父ちゃんに聞いてみようか？ 確かこの本社の神主さんと知り合いだったから」

おお、ナイス！ 持つべきものは、友達と言うか、コネのある友人だね。

あたしが「お願いっ！」と拝み倒すと、素直な優奈は、すぐにお

祖父ちゃんに電話をかけてくれた。

優奈のお祖父ちゃんから連絡を待つ間、あたしたちは、稲荷社から友香宅までの道のりの探索をすることにした。

まず、なんといつても目撃者探しだね。

「この女の子を一昨日の夜、見かけませんでしたか？」

見目の良いシャルルくんと、優奈を中心にどんどん通行人に声をかけさせる。もちろん、シャルルくんには女性を、優奈には男性を担当させたのは言うまでもない。

けれど、写真を見ても、みんな首を振るばかりで。まあ、イケメン外人のシャルルくんは、何度も写メを頼まれていたけどね。

「こんな事件があつたら外出は避けるでしょうね」

隣にいた榊原くんが、どんよりしてきた空を見上げながら言った。あたしは、「うん、それに雨が降ってきそう」と、テンション下がりが気味に答えた。

そんな時だった、優奈の携帯のバイブが振るえたのは。

「もしもし、おじいちゃん？」

「うん、うん。神社の掃除は、近所の自治会の人たちが毎日交代でしてるのね。それで何か変わったことはあつたって？」

「えっ、雨が降っていた？ 鳥居の前だけ？ ここ一週間、雨なんて降ってないよね？」

「うん、うん、そうなの。いろいろありがとう、お祖父ちゃん。大丈夫、友達と一緒にだし。遅くならないうちに帰るから心配しないで」

優奈は、祖父との会話を終えると、あたしたちの方へ振り向いた。

「聞いてた？」

「うん、こっだけ雨が降ったんだって？」

「そうみたい、マジ不思議だね」

優奈は、ハムスターのように可愛く首をかしげた。

“雨が降った”

それは、おぼろげな仮定が決定になった瞬間だった。

たぶん、少女たちが消えた場所全部で雨が降ったのではないだろうか？

「そろそろ雨が落ちてきそう。」

それに、こう通行人がいなくちゃ聞き込みなんてムリだよ。あたし、ちよつと島田くんに電話してみるわ」

あたしは、人通りが途絶えてしまった通りに、所在無げに立っている仲間に向かって言った。

「もしもし、島田くん。他のグループはどうか？こっちは、今んとこ情報なしだよ」

「うんうん。やっぱりどこも収穫なしか。冴子は、なんて言ってる？」

「やっぱ、そうか。んじゃ、雨降りそうだし、一度集まろうか？」

「OK、んじゃ一時に中央図書館ね」

けれど、優奈おススメのベーカーリーストランでお昼を食べ、中央図書館に着いた途端、ものすごい雷雨になってしまった。

（まるで、誰かに邪魔されてるみたい）

そう考えた途端、耳をつんざくような雷があたりに轟いた。

女の子たちの悲鳴があちこちであがる。

ひどい雷と雨は、夕方まで続き、あたしたちは、閉じ込められたように窓の外を見続けたのだった。

錯綜する想い？

携帯のディスプレイが“20:55”と、表示されたのを確認すると、あたしは、境内に足を踏み入れた。もちろん、同行者なんてもんじゃない。

本当は、守ヶ淵に行きたかったんだけど、そこまで無謀になれなかった。なんせ、エティエンヌに顔を出すなど言ってしまったしね。あの後、雨がやむまで図書館にいたんだけど、一つだけ収穫があった。小さな地元の新聞社が、この女兒失踪事件を大きく取り上げてくれていたのだ。

そこに書かれた見出し『女兒は、全員九時ジャストにいなくなっていた？』に、あたしの目はくぎ付けになった。すぐに関係者のふりをして新聞社に電話してみると、ちょうど取材をした記者が電話口に出てくれた。彼は、先日のテレビ記者と違い、腰の低い、誠実そうな人物だった。

行方不明になった女兒の従姉だと名乗ったあたしに、まだ若そうな記者は、「ご心配でしょう。僕も、山手市に住んでいるので他人事ではありません。何か、お手伝い出来ることはありますか？」と、親切に訊ねてくれた。

「ありがとうございます。実は、今日の夕刊の記事に、十三人全員が九時ジャストに失踪か？と書かれています。これは本当のことなんでしょうか？」

たぶん、向こうからしたらめっちゃ失礼な質問だったと思う。でも、若い記者は、少しも嫌がることなく、真摯に答えてくれた。

「はい、ありがたいことにご家族全員のお話を聞くことが出来ました。そのお話を総合すると、お嬢さん方は九時ちょうどに失踪なされたように思えてならないのです。」

例えば、山手市神舞^{かみ}二丁目^{まい}で失踪なさったお嬢さんは、お母様と電話中だったのですが、彼女の悲鳴と時報の音が一緒だったと、お

母様が証言しています。僕が取材したご家族も皆、だいたい九時ごろとおっしゃっておられますしね。

うがちすぎと思われるかもしれませんが、僕は、九時ジャストに何か符号が隠されているような気がしてならないのです」

たぶん、これが記者魂というものなんだろう。

そりゃ“全員が、九時に失踪した”とは断言できないかもだけど、被害者から話を聞けば聞くほど、結論が一つに絞られてくる、なんてことがあるんじゃない。

あたしは、絶滅危惧種に指定したいような記者にお礼を言つと、電話を切った。

その結果、あたしは、ここにいる、夜の稻荷神社に。

手水屋で両手と口を清め、拝殿の鐘を鳴らし、お供え物を置いてから、二拝、二拍手、一拝する。昼間と違い、参拝するので、ネットで作法を調べてきたのだ。

たぶん・・・いや九十九パーセント、ムリだろな。

でも、竜神がいるならもしかしてってこともあるよね。あたしは、せいっぱい頭が焦げるほど祈りまくった。

十分後。

（やっぱ、ムリか。九時がなんたらってのもわからずじまいだったな）

あたしは、仕方なくあきらめて家に帰ろうとした。

ガゴーン！

「痛っ・・・！！」

いきなり、後頭部に軽いものが当たった。

「あんさん、これはなんでっしやる？」

あたしは、頭にぶつかってきたものを拾いあげると、声の主の方へくると振り向いた。

「えっ・・・？」

なんと、賽銭箱の上に五十センチほどの白い狐がぷかぷか浮いているではないか。

そりゃ『お稲荷さん、姿を現してください』ってお願いしたんだから、驚くのは失礼だろうとは思うのよ。でもさ、あまりにも unbelievable だよ。だって、神様だよ、神様。

「えっと、それは、赤いきつねです。しかも、コンビ二限定のふつからお揚げ二枚入りなんですよ」

「そか、ふつからお揚げ二枚入りか。そりゃあゴージャスやなあ。って、違うやろ！　なんで貢物がカップうどんかと聞いとるねん！」

「おお、芸人にしたいくらい鋭いツツコミだ。本当に神様か？　すいません。ちゃんと油揚げを買おうと思っただんです。」

でも、お風呂に入ってたからお豆腐屋さんが閉まっちゃって。

だから、うちにあった赤いきつね・ふつからお揚げ二枚入りで我慢してもらおうかと。やっぱダメでしたか？」

あたしは、揉み手しながらおそろおそろ訊ねた。

「まあ、しゃあない、今回だけは許したるわ。でも、次はないで。そいで、あんさんは、わしになんぞ聞きたいことがあるんやろ？」

と、さすがに神様、太っ腹なのか、しぶしぶ赤いきつねを受け取ってくれた。

「はい、わたしは、緑が丘三丁目に住んでいる紫堂緋奈と言います。実は、一昨日、友達の妹がここの神社の前で行方不明になりました。何か、ご存知ありませんか？」

と、あたしが訊ねると、今までおしゃべりだった狐は、ふいに黙ってしまった。

しばらく彼は、黙ったまま何かを考えてるようだったけれど、

「わしは、あんさんが何をしようとしとるのか知っとる。伏見の稲荷大神にもあんさんを助けるように言われとる。」

だがな、あんさんを助けるゆうことは、あの竜神を滅するのに力を貸すゆうことや。わしは、あの竜神が好きやったからどうも複雑なんや」と、淋しそうに答えた。

「はい、わたしも竜神様のことを考えると心が痛みます。

でも・・・失踪した子供たちに何か罪があつたんでしょうか？」

すると、狐は、小さく「そやな」と言い、

「あんさんが探しとる子供は、まだ生きとる。他の子供もな。

今は、守ヶ淵の繭玉の中で守られとるが、それも長いことやないで」と、眉間を押さえながら答えた。

「長いことじゃない？ それってどのくらいですか？」

あたしは、あわてて訊いた。

そりや里香ちゃんたちが生きてたつてのは、朗報だけど、リミットが明日とかじゃ目も当てられない。

「そうやな、およそ十日つてとこやろ。あの年頃の子供は、まだ体力がない故にな」

十日！？もう二日経ってるじゃん！

「こらこら、落ち着くんや。あんさんが無暗に突っ走って何ができんねん。

ものは考えようや、まだ八日もあると考えんかいっ！

だいたい、人は、いつから水の中で息が出来るようになったんや？」

「このまま行つたつて溺れて死ぬのがオチですよな」

はは、あたしってバカだ。

それに、“ゆらぎ”に子供たちを返してくださいと言ったところで素直に返してくれるわけないじゃないの。

「そや、何事も準備が必要なんや」

「そうですね、帰っているいろいろ考えてみます」

「ああ、そうせい。

そや、あんさんにひとつ忠告しておくで。

短気は、損気や。あんさんが守りたいもんを守るんには、心を殺さなきゃあかんのや。誰かを好きやゆう気持ちは、確かに人を強く

しよるが、あんさんの場合はどうや？弱くなつとりはせんか？」と続けた。前足で『わかつとんのか』のかとばかりにあたしの頭をぺしぺし叩きながら。

かわいい姿をしてるくせに言いたいことを言ってくれと思うんだけど、やっぱり神様は、神様で、彼の言うことがいちいちごもつともだった。

「ありがとう、お稲荷さん」

あたしは、両手を伸ばすと、狐の小さな手を押し頂くように握った。

「わしは、神様やで。」

じゃが、緋奈が頑張らんとこの日の本もいけんようになるからな、あんじょう気張ってや！」

「はい、頑張りますと言えたらいいんだけど、あたしなんかにできるのかな？本当は、いつつも逃げてしまいたいと思ってるんだよ！」

なんでだか、するつと本音が出て来てしまった。初めて会った相手だというのに。やっぱり日本の神様だからかなあ？

「そりや逃げたくなつても当たり前やろな。」

だが、あんさんはひとりじゃない、そうやる？ わしたち、稲荷神もおるし、友達もおる。何よりもあんさんを、あんさんだけを見とる相棒がおるんと違いますか？」

狐は、細い目をいつそう細めて言った。

「そうだね、お稲荷さんは、三万社もあるつていうもんね。その神様が全員味方だったら“ゆらぎ”も怖くないかもしくない」

あたしは、白い狐の気持ちが嬉しかったから素直に返事をした。

彼は、確かに一番偉いお稲荷さんにあたしの面倒を見ると言われたんだろう。けれど、あたしの愚痴に付き合ってくれたのは、彼の気持ちなんじゃないかなと思えたから。

「そうや。稲荷だけではないで。あんさんが日本人やという気持ちを忘れん限り助けてくれる神は、ぎょうさん現れるやろ。」

だが、緋奈、今日は、ここでしまいや。どうやら、本社の方から

お呼びがかかつとるみたいやさかい」

白い狐は、そう言い終えたたん、ぱつと姿を消した。“赤いきつね・ふつくらお揚げ二枚入り”を持って。

「今度は、ちゃんと油揚げを持ってくるからね」

あたしは、社やしろに向かつて深々とおじぎをした。

「そつえば、あの狐さん、なんで関西弁なんだろう？」

はは、またひとつ疑問が増えてしまった。

けれど、稻荷神は、本当にいろいろなことを教えてくれた。

真実、守りたいものがあるなら私情は捨てるということをや。彼の言う通り、独りよがりな恋は、とつと封印しなければ。

それでなければ、誰も守れはしない。

狐さん、あたしさ。この間まで、父さんと母さんの敵かたきが取ればいいやと思ってたんだ。でも、今は、友達が、友達の大事な人が泣くのがつらいから、もうちょっと頑張ってみるよ。本当にありがとう。

錯綜する想い？

赤い鳥居の向こう側に、淡い金髪が光っている。

あたしの知り合いで、あそこまで明るい金髪の持ち主は、なるべくなら会いたくない人間TOP5に入る彼だけだ。

彼は、あのまま家に戻らなかったのか、昼に会った時の黒のセーターにグレイのパンツのままで、あたしに向かってぶんぶん手を振った。

「シャルルくん？」

「Bon soir. やっぱ、ここに来てたんだ。熱心に新聞を読んだから来るんじゃないかなと思っただよね」

シャルルくんは、エティエンヌとタメを張るほどの絶世の美貌。その無駄にきれいな顔で笑うと言った。

普通なら『なんでここにいるの？』と聞くかもしれない。あの記事と稲荷神社は、どう考えてもつながらないから。でも、やめとく。“君子、危うきに近寄らず”っていうことわざがあるもんね。

あたしは、彼から五メートルほどのところで立ち止まると、

「そうなの？ んでも、これから帰るとこなんだ」と、愛想笑いを浮かべた。なんで鳥居の中に入って来ないんだろうと考えながら。

「そりゃ、そこは、結界だから僕みたいなのは入れないんだよ」

まるで、あたしの言葉が聞こえたようにシャルルくん。

「えっ、なんで？」

あたしは、今度こそ訊ねた。

「それは、なんで緋奈の考えることがわかったのかっていう質問？ それとも、なんで入れないのかって質問なの？」

「両方でお願いします」

「前者は、緋奈の考えてることはとっても分かりやすいから。後者は、僕は、こういった世界に属さないものだから。

でもね、緋奈が、警戒する必要はぜんぜんないから嫌わないでね」

シャルルくんは、相変わらずまったく裏なんかありませんって笑顔のまま言った。

エメラルドの双眸をじっと見つめる。

ひとつため息をついて、

「わかったよ、一応ね」と、返事をする。

たぶん、シャルルくんは、悪いものではないだろう。

でも、だからと言ってあたしの味方とはぜんぜん思えない。

「んじゃ、緋奈、一緒に帰ろ」

あたしは、彼の言葉に頷いて、一緒に歩き出した。シャルルくんが肩を抱こうとするのから逃げながら。

「緋奈は、つれないね。僕のことを嫌いなのか？」

「うつん、嫌ってないよ、まだ。」

でも、日本じゃ初対面の女の子にベタベタしたりしないものなんだ。よく覚えておいてね」

「初対面？」

きみは……そうか、緋奈は、記憶がないんだね？」

えっ？今、この人、なんて言ったの？

まさか、ジャンヌの生まれ変わりだと知ってんの？

あたしは、目を見開いたまま、茫然と立ち尽くした。

本当は、お稲荷さんの結界に戻ってしまいたいくらい怖くてたまらない。

「記憶って？」

ひどい緊張で乾きまくった口唇が、やっと言葉を紡ぐ。

「そりゃ、ジャンヌ・ラ・ピュセルの記憶だよ。」

きみは、ジャンヌの生まれ変わりだろ？」

……ジャンヌの生まれ変わりだろ？きみは……ジャンヌの……生まれ変わり……だろ？

シャルルくんの言葉が、頭の中で何度もリフレインする。

悲鳴を上げたいのに、喉は、張りついたように言葉が出ない。

（いやあ、エティエンヌ……！！）

あたしは、心の中で絶叫した。

「緋奈、きみ・・・？」

あたしの異常にやつと気づいたシャルルくんが、あたしの肩に手を置こうとした。あたしは、それを思いつきり振り払う。

「あたしは、あなたが神様だろうと悪魔だろうと、どうだっていい。

でも、あたしをジャンヌと呼ぶことだけは、絶対に許さない！」

あたしは、そう言くと、走って逃げた、シャルル・アントワヌ・モレシャンという恐怖から。

恋を眠らせて？

あれは、やつ当たりだったかもしれない。

けれど、限界だった、彼の得体の知れなさに付き合うのは。

あつ、もしかしたらシャルルくんは、人と付き合うのに、慣れていないんか

もしれない。榊原くんは、女子限定だけど、シャルルくんにも榊原くんと同じ

ような匂いを感じるから。

とりあえず、シャルルくんが心配して迎えに来てくれたのは、事実だし、明日、そこだけは謝ろう。

本当は、彼の正体を聞いた方がいいのかもしれない、ジャンヌの関係者ならなおさら。

でも、あたしのアンテナが、“ゆらぎ”の存在を知ってから研ぎ澄まされたあたしのアンテナが、シャルルくんに関わるなど言うてる。だから、あたしは、それに従うことにした。

「ただいま」

誰もいないと知っているのに、ついそう声をかけてしまう。

アパートは、冷え冷えとしていて、あたしは、カーテンを閉めると、エアコンのスイッチをONにした。

「あたしもこれでいいかあゝ」

キッチンの棚から赤いきつねを取りだすと、お湯を沸かした。

「いただきます」

あたしは、質素でジャンキーな食事を終えると、ティーポットに茶葉を入れた。トロピカルピーチティーを。

「エティエンヌ？」

机の二番目の引き出しからトランプを取り出し、その中のハート

のジャックを抜きだしていく。

「エティエンヌ、本当にごめんね。

あんたが許してくれるなら、もう一度あたしのパートナーになってくれないかな？」

しばらく待つてみてもエティエンヌは、現れない。

仕方ない、呼びだすかあ。あの呪文、マジ嫌なんだけどな。

「^{ケルビム}智天使の長、神の英雄の名を持つ聖天使ガブリエルよ。あなたの導きにより我が騎士を降臨させたまえ。

エティエンヌ・ステファン・ド・ヴィニョール。大好きだから来てっ！」

ああ、背中がムズムズする。日本人になんていう羞恥プレイをさせるんだ、エティエンヌのヤツ。日本にはな、恥の文化があるんだぞ。

そんなことを口の中でブツブツ言つてたら、騎士さまがいつのまにか降臨していた。

「本当に好きですか？」

出てきた第一声がそれですか、エティエンヌさん。

「当たり前じゃん、あんたは、あたしの大事な相棒だもん。

えつとき、こないだは、本当にゴメン。ちよつといろいろあつたから疲れてて、あんたに八つ当たりしちゃった」

あたしは、笑ってぺこりと頭を下げた。

ちえっ、エティエンヌつてば、相変わらずきれいでやんの。同じくらいきれいでもシャルルくんにも魅かれないのは、やっぱり、あたしがエティエンヌに惚れてるからなんだろうな。

「いいえ、わたしのほうこそ緋奈にジャンヌを求めすぎました。

あなたがおっしゃったように、緋奈は、ジャンヌではありません。人とは、魂と、記憶と、肉体とで出来ているものですから」

「そりゃあ、DNAは、まったく違うだろね。

でも、この魂は、エティエンヌが愛したジャンヌのものだよ。だってさ、エティエンヌに初めて会った時、不思議と懐かしかったも

ん」

あたしは、うつむいたままのエティエンヌの両手を取ると、じつと顔を覗き込んだ。

「わたしを懐かしいと感じたのですか？」

エティエンヌがやつと顔を上げた。

ああ、エティエンヌの *Blue st Blue in blue* の瞳が見れた。あたしにとっては、世界で一番きれいな色だ。

「うん、きつとあたしの中のジャンヌは、エティエンヌに会えてうれしかったんだと思うよ」

ジャンヌもあたしと同じように、空を映したような瞳に見つめられたかったに違いない。きつと、たぶん、狂おしいほどに。

「ありがとう、緋奈」

「ううん、こっちこそだよ。っていうか、これからもよろしくね。」

エティエンヌがいなくちゃ“ゆらぎ”は倒せないんだからさ」

あたしは、握ったままのエティエンヌの手をぶんぶんと振りながら言った。

けれど、けれど、あたしたちは、なんて悲しい恋をしているんだろう。

エティエンヌは、あたしの中のジャンヌを、あたしは、ジャンヌしか愛さないエティエンヌに恋してる。

それでも、あたしたちは、背中合わせのまま、一緒に戦い続けなければならぬ。だから……。

「ねえ、エティエンヌ、一緒にお茶、飲まない？」

あなたの好きなトロピカルピーチティー、用意したんだ」

「それは、気が利きますね。」

それでは、わたしは、ティーカップを用意しますね」

エティエンヌは、キッチンの食器棚からカップを取り出し、ついでにあるものを見つけてしまった。

「緋奈、これはなんですか？」

「うん？」

エティエンヌは、あたしがさっき食べた赤いきつねを指差している。

「赤いきつね・ふつくらお揚げ二枚入りだよん」

あたしは、やかに水を入れながら答えた。

「だよん」じゃありません。

いいですか、緋奈、今、食べた物が十年後のあなたを作るのですよ。

“ゆらぎ”を倒すには、まず食生活の改善をしなくてはなりません！

ああ、うちの騎士さまは、母ちゃんかっていうの。

「あんたってば、いちいち口うるさい。」

なんで、こんな男、呼び出しちゃったんだろ？」

「今、なんと言いました？」

「うるさいっていったのよ、うるさいって！」

あたしは、そう言い返しながらか、どこか安心していた、いつものあたしたちに、口げんかばかりしてる、いつものあたしたちに戻れたことに。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9734x/>

聖杯を抱く騎士（シュヴァリエ）～Impossible Love～

2011年11月18日03時21分発行